

- 一 上州にて絹商余程富家かりしり交易ミ爲最早五間つぶれ 老公御出現を渴望し々るよ 老公御逝去誠よ力を落し此上の何卒 今公にて御回復被遊るゝを待居るよし
- 一 薩へ出し事の策にて出し由よ思ひ居レ共天下ミ疾苦を解天下ミ衰運を回す主意かれの他藩ミ説の至てよろしき由
- 一 今夜諸士郷士七十以上へ白絹一反以下への白紬被下置
- 七日晴
- 一 今曉七ツ時御供揃にて 今公御參府四日御道中にて十日御著府
- 一 御新葬ミ日は江戸御殿にての赤き花天の降乍降り乍上りせし由是の哀公御新葬よも右ミ例ありしといふ
- 一 鶴千代君御降誕ミ日は御庭よ鶴飛來て其鳴事頻り之 御廉中様不思議よ被思食菓子杯數多鶴よ與へ給ひしといふ御降誕ミ前俄よ息絶させ給ひて之とくミ間御蘇生かし人々大きよ心配せし内蘇生し給ひ口ミ中

へ何欵入るよと覺しう其後何も不覺と被仰しとそそれを直よ御こしけ被爲付午中刻よ至り 公子御降誕被遊し 老公ミ神靈乗移ふせ給ひたりと人々もいひありたり

八日晴

- 一 五日六日ミ比夜通到來是の 幕が長岡引返し所申來る
- 一 今月朔日方よやありたりん 白井執政へ長岡引戻し被仰付依て野隼長作田原等と呼右ミ旨談せしよ皆可引返といふ是よ於て小川の河和田へ長岡勢を呼付先書狀を遣して云此度寛大ミ思食よて是非引戻度尊慮よ被爲在執政へも被仰付し事かれの此度こそ是非御歸被成一先 君命を御奉し被成候上よて時勢よ寄ともかくも仕候のゝ御精神も余計ニ貫き可申と申送りしよ長岡よても議論様々なるよ何人欵告よりたりん此度よ引戻の矢張御刑の當り申候御用心云々ミ意味告しうのされのこそ怪しき事もありつれと二日は又小川へ歸りより依て高倉長八を呼寄手前の

長岡ミ者を止宿爲致さう何故俄ニ小川へ遣しそと問しよ長八誠ニ恐入申候全く私不働故御用捨可被下といひしよ是の壹人ミ事ニも無之候間只恐入候と計ニての不相濟是非再ニひ長岡勢を小川を呼寄候様といひし故直様長八の其周旋をさしニたるニ四日方ニ一同小川を來り畢竟只歸候さうニ是迄ニ歸候之勅を留ふとき欵打手ニ向ひふるうとき欵ニれをニ少しも問ずして今更歸れといふうるニ野隼等ニ心中も甚ニ頼ニ不相成何レ一兩日ニ内ニ野隼等ニ此方ニ來るへし口上ニ寄テの生けてニいと返まさしたれといひて河和田ニ來りし由是を聞テ野隼等ニ不易と思ひ其旨白井ニ咄し右ニ譯ニて候へニ何卒長岡勢ニ信し居候者ニ先ニ立參り申度それニ田丸ニ可然併田丸へニ此方様ニてニ不可然是の肥田執政ニ御達ニ致度といひニ五ニ日朝肥田ニ田丸へ達ニしニ田丸の其時御返し被成候御事業ニも無之只返レと申候とて返候譯ニ參り申間敷とて返りしニ夕刻ニ野隼ニ來りしニ留守ニ付六日夕ニ至り野

隼長作加藤來り是非御同道可仕といひしニ田丸云諸兄ニ先達ニ右ニ儀御周旋ニよし私ニ昨日被仰付候のみ如何ニ釣合ニと申も不存私參り候の易き事ニさうニ不時ニ有之且是と申御事業ニもさしそれを説付返し候様ニの中々出來不申是儀ニ御斷申といひしニ加藤書付を出し是の執政ニ長岡勢寛大ニ思食ニて云々と申證文ニ御坐候是ニて御諭可被成といふ故假令證文ニ通ルるニ私ニてニ行届不申御同道ニ御易き事故ニ參ニもニセニ無言ニて居候ニ外無之それニ私手札をニ預け可申候間私ニ思食御申諭被成候ニ矢張私參り候と同様ニ可有之と答し故三人も甚ニ困り立歸ると間ニもニ梅澤田丸へ行貴兄執政ニ御達御受ニ相成候よし此度ニ是非御登り前御引返し思食故何分御急ニて御申諭可被成といひしニ田丸それニ先刻下野等へも申候通ニても私ニ杯ニてニ及ニひ不申とて彼是議論ニ所へ壹人ニけ來り長岡勢ニ只今何方へニ立去候由ニ分り申候とてニ今晩ニ事ニ不參と告し故梅澤も返りし由後ニ聞ニ長岡勢ニ御直

書御下ケとの事故河和田より行し何もなき故歸りしといひし由

九日陰

十日陰

十一日

一大城御普請御成就よし

一當時横濱に有様日増し彼ら術中より陥り今の都下物價騰貴小者杯多くの薩摩芋位まで取績白米四合居依て近比より至り夷人へ奉公へ出る者多し男の一日五匁女の貳朱といふ余程奉公人多くあり又妓樓杯も繁華よて神奈川等の物淋しといふ

一九郎公子は是非先日御下りにて御見送りも可被遊思食先月十八九之比今公へ達て御願被遊しう幕へ嫌疑等よて御濟し無之不得已御止り被遊し所公御參府に上の近々御下りとの事  
十二日雨

一貞芳院様へ若君様へ鶴千代磨と御名被進候旨御達し出る

十三日晴

一内藤紀伊守は是迄不氣力ミ沙汰も有りしう近比より至りての大激論常きいふ所も商館を打潰し打拂ミ令を出す外かし杯ミ類よて安對と始終戦居しよ近比の内藤勝色ミ様子安のとも長き事の有之よしとの事  
一御登り前の幕ミ釣合四分六位ミ所御登りよての貳分程徳を取し由  
一十一日内藤へ使者を以て申上し私不氣力よて閣老被仰付候事誠よ恐入候次第併午不及幾重よも周旋仕候積故相應ミ御用の何卒無御遠慮被仰聞候様仕度私身よ替候ても御世話申上度と申上し由

十四日晴

一橋様九日よ御登營被遊し由

一十二日大城御普請御成就諸大名惣登城御祝儀申上

十五日陰後晴

一今日 四公子 瑞龍御拜を供奉し奉る

十六日晴

一八ツ時 公子は從て瑞龍を歸る

一十三日格別ミ思召を以て御忘御免被仰出實御忘の十六日迄ミ見り之  
十七日晴

一英想院様瑞龍御拜

一十一日御著城上使として久世來邸

一荻信久木ミ御處置無之様 公へ申上大に御叱りを蒙りしといふ

十八日陰

一今日野村ミ一条ニ付石塚へ行

十九日雨

一雨に寄て石塚に泊ス

廿日晴

一今日石塚を歸る

廿一日

一十九日安島帶刀ミ家へ二十人扶持茅根鮎澤ミ家内へ五人扶持被下其

余幽閉ミ士大半御免

一廿日長岡へ出て後慎み居し者共御免

一近々要路打可吹出大誠島居大森富田笠井ミ類之といふ尤是ハ櫻田御處

置以後亦るへしともいふ

一十六日三隱御用ひ 幕を來る是諸藩より申立て出來し事といふ

廿二日陰

一今日石塚來訪依て周旋云々ミ議論

一岡山候よて 九郎公子御養子ミ含白井へ内々吹懸ありしといふ

一鶴千代様御誕生前 御座中様俄に御不例ミ一条熱田祐元ミ直話よ八月

十五日夜四ツ半時祐元宿直ミ時女中參り俄に御召是迄ミ御規定よてハ女中召ノ事ハない

依て不取敢御前へ出し只今不思議ミ事ありし一ツミ火の玉袖の内へ入申候間手を以て押出せしよ又其次の腹ミ中へ火の玉入り申候と其儘俄は目舞氣分を損せしと被仰しよし夜の四ツ半の御國よて 老公御大切は被爲及し時之其後 貞芳院様被仰しよも 前様常々八月の必ず出産あるへしと被仰しよそれもかくて御逝去後よ至り生しも不思議と被仰しとぞ

一三隠出現前中山大久保等執政よ可任と云 公も兩人よの余程思食もはるよし

一野村杯も此度の歸る様可成先日江戸へ出有志と應接もありし由

一長岡勢の先日歸り恐入申立居るこ

一儲君御降誕ミ後杉浦大森太田板橋林等申合御小姓頭取萩信と申合セ

儲君を御三男ミ召りよ拵へ水谷婦人ミ生し鐵之允様を儲君と可定見込よて萩を以て 貞芳院様へ萬之允様と御名被爲進可然と巧よ申上し故

御聞濟よかり其儘江戸へ御運よかりし 公殊ミ外御配慮被遊肥田執政を召し 貞芳院様よてケ様く被仰し由扱々是非もあき次第之鶴千代ミ出生よての一國も安心せしとの事あるよ今更三男とかしかの此先水國の如何様ミ事よ及も難計此儀何卒穩便ミ事をえつめ申度如何思ふと被遊しよ肥田誠よ御尤至極私身よ替候ても御諫言可申上と御答申上とりの然ふのおれと一ツよ御前へ出右ミ儀可申上とて 御前へ御同道申上しよ 公被仰しこの此度ミ出生萬之允と御名被進候由如何ミ思食よ御坐候やそれかふの眼前親ミ事よも候得の私よも一應御咄位可被爲在事殊よ此度ミ出生一國ミ者皆鶴千代く申悦居候由是迄ミ腹とも違候得の是非正統ミ鶴千代を不被爲進候ての此後如何成行可申やと御泣あうふよ百方被仰肥も色々申上しよ 貞芳様も始の御承引もあうりしよやふく御吞込被遊成程尤之然ふの直様其振江戸へ運ひ可申とて愈鶴千代君と奉稱しといふ虚實の未タ不知とも鏡之允様ミ御母の水谷善

四郎といふ幕々御鷹匠組頭ミ子之組頭ハ閣老を始メいつくよも出入致役故久木等何鐵之允様を儲君とかし是を以善四郎を引付此手を以幕へ取入己ウ榮利を貪んと工み四百兩計賄として先善四郎へ遣せしよ大き被斷し由是ハ先達ハ天下ミ有志水國よて萬一右ミ事起ルハ水國ハともかく天下ミ存亡よも至リ可申憂しよ久木等ウ策をや聞ふリ々ん藤森恭介旗下ミ士を以ていひ入しハ當今ミ勢誠累卵天下ミ安危 徳川家ミ存亡今日よ決し申候今貴君ミ孫ハ 水國ミ庶公子よて見へれハ貴君ミ御了簡誠よ大切ミ場之萬一それを 水國ミ君とあさんとて無理ミ事被成候ハ、 水國ハ是切のみあふハ 徳川家ミ存亡よも拘り候様相成可申 徳川家も亡ハ 水國も亡候ハ、としや何人ミ孫を御持被成候とて何よも亦り申間敷又道理を以て御押拔よ相成候ハ、水國ミ君トハ不相成候得共必定一國ミ大名よハ亦り申候右ミ所々御了簡云々委細申入しよ水谷大よ吞込それハ所々相談せしよ何レも右ミ論故益心中一

決し々るよ前四百兩を以て取入し故手もかく蹴拂しといふ

廿三日

一公よて松御殿之中御引拂よて 貞芳様御殿御普請ミ思食よて既ニ三浦も御供して登りしよ一体松御殿ハ 幕ハ御普請ありし所よて手を入候事不相成といふ事よ亦り御國よて材木御見立よて御普請ニ可相成といふ

一昨夜戸田執政三浦賢男等下著

一薩人江戶通行ミ時夷人何欵不氣服ミ事ありて鐵砲を向しを虛砲あるヘしと思ひ身をひねりしを左よあふて袖を打ぬきし故直よ夷人を殺し其旨をと、けて宿所よ歸りしよ夷人も其事よ就てハ何とも不言由

一先日ハ駿河臺ハ大城を圖し或ハ不二山又礮邸杯も圖よ取しといふ

一夷人日光拜願 公邊よて御指許しかりしといふ

廿四日

一 今日除目尼子津衛門の瑞龍御山守被仰付隠居ス鹿島文四郎の寺社を轉して兩御次番とある是の要路よて戸田の土産御用ミ中ヨ右ミ事を入て仲間を欺く策と見ヘヨリ尼子の 老公へ御側近く被召仕 公ヨも御親敷人ヨて正義ミ士之全く昨日不時寄合ヨて拵ヘし事ヨて尤最前ヨ右ミ含ヘヨリしヨ要路ミ中ヨも又正士ヨリて是を拒キシヨ其人ミ引しを幸として隠居ヨセシ之 悴長三郎の江戸勤ヨて廿五日ヨ至リ跡式濟シといふ田土部六衛門 悴<sup>三</sup> 耶<sup>七</sup> 同日小十人被仰付シヨ當人の江戸ヨ在リ江戸ヨ御馬廻ヨかりシといふ同日信木縫殿監府を轉して寺社役トある

一 今日 勅諭御返納御猶豫ミ儀被仰立置シヨ無御據筋ニ付御聞届被遊候との御沙汰被仰出

廿五日

一 勅諭の別ヨ御藏ヨても御造立ヨて嚴重御守衛可被付といふ

一 櫻田ヨ御處置近々ニ可有之此方ヨて多分國蟄居位ヨいヨし度見込カレ

共 幕ヨてハ如何カるヘシヤ

一 上巳ヨ井伊ミ供をして櫻田ヘ出し姓名書出し候様 幕ヨ被仰出シといふ

一金孫の御預ケ中始終堂々押拔居私儀櫻田勢ミ張本皆私の指揮いヨシ候事故嚴重御處置無之候てハ 公邊御政体御立被遊間敷何卒如何程も嚴重被仰付候様といふ論ヨて間牒杯も金孫ミ至誠ヨ感シ正論ヨかりシ者もヨリシといふ

廿六日

一 來月九日大城御移徙 公も其時の御登城可被遊それ前ヨ櫻田ヨ處置ハ可付といふ

一 讃州の愈死ヨる方實説カリしいふ

廿七日

一 立太子の來三月被仰出ヘシといふ 主上ヨてハ殊ミ外御切迫 叡慮を助參スヘキ人もカク且ハ去年ミ事ヨも御懲被遊御殘念カウヨ恭默ニ

よしよしといふ

一 量の宮様 幕へ御縁組被仰出是も來三月御下向といふ一説は御縁組  
 ミ事 主上より殊の外御好み不被遊併無致方御許容よかりしは中山公  
 達て御諫言申御縁談を御破り被遊しといふ先月松浦六郎杯水國へ來り  
 しの矢張中山公大坂ミ町人へ談し 主上宸襟を被惱既は右ミ始末如何  
 いふし候てをろしうふんと被仰しは町人實は御尤至極今の世を以見候  
 は水國の外は頼は可成國無之承候得は誠は金穀は窮し居るよし水戸ミ  
 湊といふ所は二三里堀割候得は江戸へミ通路至て便利奥羽ミ舟皆此湊  
 へ輻湊するよしそれへ此方にて力丈ケ品を廻しさむき候は、水戸の潤  
 ひ莫大にて大利を得可申左様いふし候はもとよかく一度内の様子を採  
 索して後如何とも可仕とて兩人を下せしこといふ

廿八日

一幕にては是非薩州を參府可爲致積にて是は懸り居るよし

此項恐クハ誤  
脱アラシ  
校訂者識

一 黒田へも又召狀着しといふ

一 先日神奈川奉行應接ミ時夷人を砲を以奉行を殺したるは夷人の色々拵  
 へ尋常ミ病氣ミ更りよかしくといふ

一 會津にては越後邊ニ飛地五萬石計を下地云奥にて右替地願しは一國武  
 備專一ニ心懸士風も質素にて政事も行届候趣畢竟心得方宜敷故ミ事と  
 て格別ミ思食は願ミ通り相濟尙是迄ミ土地も御預ケニありしといふ

廿九日

一 今日高橋吉來鳥居ミ御尋御免

一 林了も近比は如何ある譯は常ニ人は咄はも當時の讒説杯被行とては  
 勤居候事不出來今の中引込不申候ては又用る様はもあるよし杯いひ居  
 しは先日ハ刀を抜て兄を斬とて追廻しをやふく取押へしうは然は  
 馬を切るとて騒きし由陽狂はもせよ兄は手向ふは如何

一 久木へ出入ミ者へ久いひしは當時の實は容易かす我家杯へ出入いふ

秘笈日録

百八十一



し候ての身の爲も亦るまじけれの如何ある手狀見付今の中激ミ中へ  
這入候様可致といひしとそ  
此月小建

萬延紀元庚申十一月朔陰

一昨日夜通到來昨夜此方も直様夜通指立執政ミ退出も夜も入

一信木寺社役もかりての神官等大不歸服祝儀も出ましとて所々むすむ  
すむり

二日陰午後晴

一昨日長州攝州等諸藩有志四五人來ル

三日晴

一幕ミ勢次第ニ順風櫻田ミ御處置も近々あるへき沙汰ミ所又々延引をへ  
しといふ是の久世の見込も先安藤對州を打て後も處置せされの寛宥ミ

御處置の出來ぬとの見込よて延るといふ

一朔日は内藤紀伊守御用召

一今日石塚へ一書遣し明日明後日ミ中御光駕云々

四日

一京よての九條殿下ミ家人と若州ミ家人と爭論若州よの貳人痛手多分死  
ぶるとそ依て若州家人等申合大勢よて九條へ押寄門坏打ふきりるよ  
九條よての大は驚き直様役人体ミ者を若州へ遣し内濟も出來しといふ

五日

一一橋公御登城被遊しの虚ミよし

一安對の可被打沙汰のみ流石よ井伊の殘黨まうり付居る故狀打も難儀ミ  
上當節夷情切迫依て外國ミ方を専ら打任せ置故安對閣老外國といへと  
も政事の一ツも口を出す暇もなき混雜久世等もそれよて一ツの息をつ  
き居る位ミ勢安對を打て後櫻田ミ所置を可付とて久世御所置を延し居

るといふも疑しといふ

六日晴

一 諸夷天津にて敗北して後佛郎察を謀し合セ先達滿清を責しよ清よての内よの長髪賊日増よ勢強く其虚よ乘しられし事故散々よ打まけ朝鮮よ近所よ落よりといふ是よ於て諸夷又々朝鮮を押し寄て責んとしたるよそれよの舟懸りよ所よの便利ありし依て對馬を借り度との請よよし對馬を被取の西國の是迄かれの幕よても甚よ窮し居るよし

一 長州下ノ關の西國の咽喉よて九州諸侯よ參勤も是よ懸らされの上國へ來る事よは是よ港を開きての最早九州の 神州よ地よ非す然るよ墨夷是よ望を屬し既よ去年中 幕よて長州へ替地被下置て港を開くへき旨吹懸られと是の長州よて蹴拂し之然る所今年八月又々 幕よ吹懸り長州人今以沸湯學校杯へも議論を懸しよ如何とも是へき様かく役人よ見込の斷然として 幕へ斷るも如何かれの先ッ三年も猶豫を願ひ其内

よ何と坎可爲との定説よよし長州よ無人可知右よ譯故今一層強く幕よ懸りの手もかく下ノ關をの献るあるへし依て長州有志九月廿四日出立よて水戸へ來り相談す水國有志答し下ノ關の要害よ地九州諸侯此地かくての參勤も不出來如何様 幕との引合故長州小國よての押切れぬ場もあるへし九州諸侯力を合せて押切の貫く様よも可出來西國よて下ノ關かくあふの日本は是迄故九州よて若應セすの 日本よ滅亡愈今日よ決しよる之九州よてとしや 幕へこそ出る心かくとも 京師を打捨て構えぬといふ人のあるよし是を外策かしと答しよし如何可成や 水戸の 勅御返納も甚敷騒ふといふ

七日晴

一 櫻田御所置御場所柄不辨狼藉との事よて切腹といふ論行れ久世も押切れぬ勢依て内紀へも説を入置候方可然候間是へ云々との申聞ありし故直様有志よて内藤へ入れしといふ説あり又池田播磨守いひしの櫻田御

所置の極寛典ミ調よて指出置候間最早久世殿ミ御了簡一ツ之といひ居るよし

八日晴

一 脇坂の五月中引込居久世初出勤を勸し拙者も男は候へり一旦引込候上の假令如何程御勸御坐候ても決して出不申とて不聞よし依て不得已閣老も御役御免ミ調をかしまりといふ

一 九郎公子ミ御難儀不可言御付ミ者も御取替被遊又御國へミ御文通も今公へ御覽よ不入の御遣しよも不被成是迄の御廊下傳へて御前へ御出ミ所も今の御庭を御出ミよしそれも月よ六度位ミよし奸論でも吐かたれりともはけぬと被仰しとそ横甚等ミ策あるべし

一 九條公の大工が御まきよて御自身よて雪隠杯を立てりこししよ被成居よし有志の一切御用かく好人杯御氣よ入れりのみ遣ひ方かんかの用ひ様杯御傳受被成るよし 幕も莫大よ〇を御取被成たれとも一圓

人よも不被遣關白職よて流石よ四方ミ路遣も福れとも菓子杯もろびうとへかひ内の御近所よも不被下臣下も恨み居るよし 主上御盛よ被爲入る故畏縮被成御參内もかし是迄御參内よても 主上御逢不被遊此後の御引込切あるへしとの事

一 西國杯の 徳川家威武ミ行る事甚敷殊の外 幕府を恐れ居肥前よても薩よてもととも 徳川家ミ衰運よ乘し天下を押領せんとせる者の壹人もかく又西國を勤 王ミ旗を舉て天下を回復せんとせる者もかく所詮回復の 水戸家かたてり可出來勢あし 水戸よて諸方へ手を御廣げ被成候の、西國の盡く服從可仕乍併それを御當ニ被成候事の不出來候此後夷人戦を致よも浦賀を江戸へ迫候の必定萬一ミ事有之甲府へ御開き杯申候の、西國大名の皆各り國よ引取壹人も江戸よて防戦仕候者有之間敷國富兵強き者も江戸ミ助ケよ成不申候只參勤をいやよ思ひ居候故眞ミ胸中の國へ引取候をのみ望候之今よも事をかすへき様

ミ勢を爲見居候も畢竟のそれ故よて決して事を起す事の無之候間 水戸て回復を被成候半よも今迄ミ様よての参り申間敷何と欵手口を御替被成候方可然西國のとの國も左様ミ譯合之云々長州人ミ咄

一長州よての増田彈正正論ミよし是の一萬千石よて國老を勤父の越中といひて長州を改革セし男之彈正十八才よて丑年よ人數を引連江戸よ來當年の廿五才是の余程ミ人傑ミよし先年も 京ミ事骨折吉田才次郎と共に 幕へ被呼出へきを長州よて〇を井伊よ遣ひ免れし者之併  
余程金の遣ひふる者と見へて萬一水戸杯を事起りし時井伊へ加勢をへき大名加賀藤堂杯六人ありし其一人の長州ありとて井伊も頼よしふる程之

一 体ミ事をいへの長州も左迄盛ミ國にてのちく今度來りし者も空論杯多しといふ

一 小林民部江戸よて死ふる事京よ聞へたれの其妻自害して死ふりといふ

烈婦といふるし高橋兵部の諸大夫氏族ミ中よてもいふぬ人物之といふ  
一 伊丹藏人曰當時ミ人三知といふ事あり一ツの天下諸侯ミ心を知り二よの天下ミ形勢を知三よの小人ミ心を知之吾小人ミ心を不知して失策しふりといひよし

一 量ノ宮様の愈來三月御下向若州を御輿を初色々御支度ありといふ有栖川家へ御結納迄ありし有栖川を御斷よかりし様よ拵へふりといふ

一 祐ミ宮様の御加冠被遊睦仁親王と奉稱

一 堂上方の今以御解よ不被爲成欵未分明

九日陰至暮風

安政戊午ミ厄難實よ天地ミ大變四海ミ公憤よて堂々ふる 神州數百萬々  
ミ生靈 天朝ミ德澤よ浴し 幕府ミ威武ニ服する者誰う敢て慷慨悲憤  
痛心疾首して力を回復よ盡さる者あらんや況や我東藩 明主ミ撫摩を

蒙り 國家ミ至難ニ處スル者ニ於テをや是時ニ當テ 大將軍幼冲奸邪政  
 を擅ニし虎狼豺蛇牙を磨キ眼を瞋クシ 天朝を視る事泥塑ニ如ク公卿ニ  
 處する事奴隸ニ不異況や藩國ニ於テをや況や天下ニ於テをや生民の内ニ  
 困み夷狄の外ニ驕リ 天祖ニ神廟 東照宮ニ原廟といへとも又尙夷狄  
 ミ腥風を蒙るニ至る世道ニ滅裂豈勝テ慨ニへけんや是ニ於テ 明天子  
 かしこくも玉體を抛テ衰運を挽回セんと思食立れ狂瀾怒濤ニ中千挫百折ニ  
 間ニ處シ。一萬分ニ思ひし者も多ウリ々るされト時勢ニ險難ニ  
 今尙昔日ニ異ナル政體ニ利害得失人物ニ賢否黜陟ニ如キ一言口より出  
 る時ハ皆名ツくるニ朋黨を以テシ忠臣義士も空しく有爲ニ志を抱きて血  
 涙を白屋ニ中ニ拭のみうれふといふも愚かるへし然るニ當時幕府ニ閣  
 老關宿侯深く回復ニ力を盡され令名日増ニ盛ナリ兼テ 東藩ニ爲ニ力を  
 盡されし事も不少候ニ赤心兼々聞及し事もなれぬ如何ニもして彼所ニ同  
 志を入置それを手蔓として 本藩ニ回復をも計るへたれとて今茲萬延紀

此以下一葉散失

此以下一葉散失

元九月廿九日ニ夜同志忍やうニ議論を盡セシニ皆可然トそ同シ々るさら  
 の其策如何して先手を下すへきといひしニ三年以來國難ニ赴キ死を決シ  
 テ 君を諫めよいらセシ事杯のなれと他藩との駈引ニ至りてハ未タ試レ  
 シ一兩日ニ内ニ下著ニへしと聞ヘたれハ是究竟ニ事こそなれとて美濃部  
 ミ下りを今やくとそ待りたる是時ニ同志ハ淺田富之允川瀬介三郎關  
 強介床井莊三ミ四人ノ十月朔日川連行藏來る是ハ床井ニ知る人ニ於テ關宿  
 ミ人之家の眞弓といふ所ニ其父ある者ハ關宿ニ飛地壹萬石十八ヶ村ニ支  
 配をさる者ニ於テ富有ニ人之行藏ハ當時藤森恭介ニ塾ニ遊ヒテ居しハ此度  
 尋ね來リし故幸ニ事と思ヒ國ニ事杯聞シハ國中ニ有志ニ士トてハ更ニ無  
 之公用人杯ハ都テ俗物ニ於テ更ニ致方無之只舟橋直理位あるへし是ハ用人  
 をも勤めし者ニ於テ候といふ舟橋ハ名ハ兼テ聞ふる人物當時屏居ニ身ナリ  
 ト聞居しハ舟橋君ニ御名ハ兼々承知セしハ是トハ御親しく候やと聞シ  
 ハ行藏云是ハ誠ニ懇意ニ御坐候已ハ舟橋不慮ニ事イテきて揚獄ハ入シ事

御坐候舟橋の妻と三人の子と御坐候て萬一ミ事あるの外は頼み可成親戚も無之路頭も迷とん事を不便と思ひ其身獄中よりあり股の血を刺して書状を認め川連ニ遣し妻の里方へ預ケ可申嫡子の浪人致候てもとふり取續可申幼少ミ者の何卒幾重も御世話可被下候杯申來候故私方にて厄介致し申候右ミ譯柄故至て懇意ニ御坐候と云故水戸は壹人御坐候は是の勿論城下へ住居致居候者にて無之さりとて又農民も無之所謂亡命ミ姿ミ者にて奇抜ミ生質にて候が何方かりとも仕を求め何卒分寸ミ忠も盡し申度と兼々志願にて御藩ミ御賢名も委曲承知いし居候故可相成の御藩へ御奉公も仕度杯と申候事御坐候得きケ様ミ人物のこの道と欲にて御奉公も申候様との相成間敷やといひし川連云それ誠ニ感心ミ事敵藩杯の中々左様ミ譯にて無御坐候得共若實は當人右様ミ者も候の何分も骨折申度私も是と申奉公も出來不申候得の責て左様ミ事もても周旋仕度何レ舟橋へかり談し候上何と欲御挨拶可申上云々にて川連

の立帰りぬ同三日美濃部新藏下著四日朝直様右内意を通し五日ミ夜に至り一同にて美濃部と談論此方ミ持論を盡せし美曰それの誠ニ御尤かりふ當時杯關宿も取入杯の甚難物直様蹴返し候姿〇も隠て入り申候としや〇をの不厭もせよ先方にて容易は受不申且關宿とても當分居り合付候迄の周旋も致可申中々打拂杯の思も不寄人物當節諸方へそれ〰手續を付置候得共三月比取懸やふ〰〰近比話を組候所も有之とかく此方にて一番卑き論であられの中々申出し候事も出來勢彼是如何も釣合物にて當時ミ所の東叡僧徒ミ手よりときのかし併手ミ廣げたる丈ケの幾重も廣げ申度愚案にて此度ミ御存意ミ所可相成の誰も氣ミ付ぬ所にて緊要ミ所を選ひ入置候事上策人ニ被知候ての誠ニ仕事も思ふ様も不出來當時ミ所にて土屋候可然と存候是の久世との至て親敷中御坐候尤間柄にて無之久世も是非土浦を關老ニ引出し度存し居既は先達本多濃州關老もかりし時の幕議も様々にて一決せざる折久世いひしは是迄京大

坂を勤候者を選候の昔より仕來りてそれをも不構外ミ人をのみ選か  
 の誰ガ 京大坂を勤め可申や今度ミ閣老の本多濃州可然と申終本多を  
 引上ケ申候と久世ミ話を承候者有之是の久世ミ内心よての土屋を閣老と  
 致す所極意かれ共其時の左様も申されぬ釣合よて眼前土屋の大坂を勤  
 ぶる者かれの 京大坂云々と申論を立て表向本多を出しされと詰りの土  
 屋との積りよて右様致ぶる事と承る是の無相違様承り申候東叡ミ説  
 多くの當り申候所右土屋ミ一条の東叡よても咄御坐候得き愈其説ミ如く  
 土屋閣老と押出し申候のいふ迄もかくとしや今迄ミ姿よても眼前久世  
 もそれ程迄ニ思ひ居候土屋ミ事故随分此手よて事を爲して出來ぬといふ  
 でのかし且土屋かふの小生誰も氣ミ不付手御坐候併是への脇を一手這入  
 居候故是さへ離し候得の究竟ミ所かれの此手へ入申候ての如何と申かる  
 此方只管久世へと思ひ込ぶる所故成程それも可然其外は無之候やと問  
 して其外の跡部甲斐守は御坐候是も久世との極懇意併是よの未夕人よ

此下ニ至て美濃部ミ人ミ認るるハ細書ミ一  
 之所をいひ

かれぬ手と申の無之候杯談論ミ中彼是ミ事ミ移り依て其論も兩方共は是  
 と決しぶる事もかし只それの土浦よても跡部よてもとちよても宜敷候間  
 何レ御登りミ上何分御工風よて御申越ニ仕度とよかく御相談次第ニて服  
 部藤衛門を爲登是を先方へ入置候積ニ其節の何分御論も伺候様爲致可申  
 とて別れたり同七日 今公御參府美濃部 君の供奉して南上しぬ依て同  
 志又々申合先は美濃部ミいひし土浦ミ策實も尤ミ事かりき其時の外ミ  
 事杯は移り議論を盡さる事こそ遺恨かれ南上ミ後又別は名策あるやハ  
 志ふされ共美濃部ミ口氣を察するは彼も土浦を隨一と思ひし様子我も此  
 を尤と思ふ所かれの旅中ミ様子聞あうとかく此方ミ心も響くセぶる方  
 可然とて則一書遣しぬ

拜啓御旅中定而御安健御著府可被遊至賀ノ 扱之先日御下りミ節の御  
 繁劇をも存あうゆるノ 得拜眉嘸御疲被成候半誠は平生ミ志願も届  
 き殊は發明仕候事共も不少千萬奉多謝候一別以來同志打寄色々申合候

所其節御論御坐候土浦秘策實<sub>ニ</sub>至當<sub>ニ</sub>御名論<sub>ニ</sub>奉伺候小生等先日申上候通進て殉國<sub>ニ</sub>節も盡し得<sub>レ</sub>不申候へ何卒退て補國<sub>ニ</sub>微忠をも盡し申度儀必死<sub>ニ</sub>至念<sub>ニ</sub>御坐候得<sub>レ</sub>右御論<sub>ニ</sub>所愈可然との御見込<sub>ニ</sub>候の直様例<sub>ニ</sub>人物<sub>ニ</sub>も申談しそれ<sub>レ</sub>手當も可仕將又御登り後別<sub>ニ</sub>御心付も御坐候の<sub>レ</sub>それ<sub>レ</sub>ても宜敷<sub>ニ</sub>もかく<sub>ニ</sub>も萬事不案内<sub>ニ</sub>儀との道御論も伺ひ不申候ての此先共<sub>ニ</sub>誠<sub>ニ</sub>指支申候得<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>もどふ<sub>ニ</sub>是か<sub>レ</sub>の少しも國<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>も可成と被思食候所御存分<sub>ニ</sub>伺ひ申上度土浦<sub>ニ</sub>策如何様御名論と存候得<sub>レ</sub>其後便御示諭<sub>ニ</sub>上との振御相談可申上何<sub>レ</sub>も草<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>一

十月九日

再啓先日<sub>ニ</sub>御論通土浦<sub>ニ</sub>の土浦と御申越<sub>ニ</sub>相成候上<sub>ニ</sub>例<sub>ニ</sub>人物<sub>ニ</sub>も直様議論を盡し先貴宅迄指上申度右<sub>ニ</sub>就て<sub>レ</sub>其都合<sub>ニ</sub>所又<sub>ニ</sub>〇等も當分との位も拵へ可然や右<sub>ニ</sub>儀<sub>ニ</sub>何卒御申越<sub>ニ</sub>仕度委曲<sub>ニ</sub>筆紙<sub>ニ</sub>盡

此以下一葉散失

し兼候故御教諭次第と<sub>ニ</sub>かく當人拜眉<sub>ニ</sub>上御伺可申上何<sub>レ</sub>も早々不備

濃州 君御直披

淺井富三

先ツ<sub>レ</sub>及貴答候土浦<sub>ニ</sub>策も先日御咄合申候通<sub>ニ</sub>人壹人有<sub>ニ</sub>之是を<sub>レ</sub>所置い<sub>レ</sub>し様<sub>ニ</sub>指支居申候それ<sub>レ</sub>へ出來申候得<sub>レ</sub>土浦<sub>ニ</sub>限り申候様<sub>ニ</sub>候得共畢竟それ故<sub>ニ</sub>延引仕居候尤外<sub>ニ</sub>手道を付申候<sub>ニ</sub>も格別<sub>ニ</sub>入用<sub>ニ</sub>も無<sub>ニ</sub>之明日<sub>ニ</sub>杯<sub>ニ</sub>罷出申候積<sub>ニ</sub>御坐候間後便<sub>ニ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>ニ</sub>し<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>貴意候事<sub>ニ</sub>御坐候御端書<sub>ニ</sub>人物と申者<sub>ニ</sub>の岩印<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>や相伺申候尙更先日<sub>ニ</sub>御馳走頂戴御禮申上候忽々以上

十月廿四日

四方賢兄御直披

孤子拜

初大井六郎左衛門 上公<sub>ニ</sub>奉扈從 礫邸<sub>ニ</sub>至る美濃部<sub>ニ</sub>の縁者<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>あれ<sub>レ</sub>の直様是へ音信し<sub>レ</sub>此後往復等<sub>ニ</sub>事美濃部<sub>ニ</sub>も打合セ<sub>レ</sub>る<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>の五日<sub>ニ</sub>夜美濃部と談論<sub>ニ</sub>時已<sub>ニ</sub>右<sub>ニ</sub>事迄も談し置し故其打合も<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>せし<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>而大井

秘笈日録

百九十七



下著後其顛末を語りぬ是よ至て大井右ミ書状を持來りし故同廿九日則返書指出しより

貴翰拜誦定而御起居御安健奉賀候今日の時ふぬ雷聲扱々心を痛め申候貴地の如何よ御坐候や御登り後も何程欵御繁劇ニ可有御坐殊よ縷々御示諭難有仕合奉存候扱例ミ人物と申上候ハ御察しミ通り服部藤衛門ニ御坐候是迄ハ鹿島よて何方へ歟用候積も御坐候様子ミ所立蕃を轉し候上の當人も格別進退致易き様相成候事ト奉存候扱又よまり人云々ミ儀既よ先夜も伺候事ニ而實よ御尤至極何分可然奉願候此方よても折角存詰候志願〇ミ爲よ半途よして廢し候様相成候てハ扱々殘念千萬依而當節手を替振を替始終ミ持張出來候様工風仕候得共御承知ミ世態ニて未タ思ふ様よも不參彼是御周旋被下候よも兵糧ヲ專一故定而御入用ニ可有御坐實ハ今便少しも指上置度存し候得共當節少々指支申候間何卒可然御推恕可被下候何レ近々爲指登候様可仕とよかく時日を爭候より

始終ミ成□故先便御申越ミ所時日よ不拘御都合次第宜敷御工風所祈御坐候余之後便を期し早々不備

十月廿八日

再啓當時ミ天氣上の相應順風ミ様子かれ共下よハ以前ミ如く雨雲立掩ひ開晴ミ儀實よ容易ニ無之少しも油斷相成不申候天下ミ形勢を察し候得ハ今更内の中のおよすよのみ苦心致居候も扱々淺間敷次第併天下よ先立て天下ミ憂を憂ふるハ如何よ末世かれハとて一旦事の起□  
□却て諸藩□跡へさへ續候事不相成候様よてハ遺憾とも耻辱とも申様無之□心のみ□立申候何卒眞□よ少しも力を盡し候様仕度◎以下散々

秘笈御廟算高松

秘笈日録

二百

晚綠齋秘笈

目次

御廟算伺書 景山太公

勅諭

高松邸館問答 高橋柚門

秘笈御廟算高松

御廟算伺書

過日 勅答ミ儀ニ付 上意ミ趣も御坐候故上書致候得共實ハ 公邊御  
懐合少しも不奉承知一ト通伺候迄ニテ天下ミ一大事何くれと認上候ヨ  
ハ元より無理ある譯ニ候得ハ登 城いふし各方初ミ御存意并海防掛り  
人々ミ見込をも篤ト承候上ニとも存候所退隱ミ身分此節柄登 城と申  
も何欵目立候てハ不宜とも被存又海防掛りミ族を拙宅へ招き承り可申  
共存候所是又世話いりハと存候ニ付無據認候へハ自然御不都合ニ相成  
事と存候一休御任セヨ相成居候 征夷府ニテ被遊候御事故 朝廷ヨ  
も御安心被遊候て御伺ミ通御許容ニ可相成筋とも奉存候得共ケ様申候  
拙老も御懐ミ儀不奉伺候得ハ見通し付不申宜敷共惡敷とも實ニ認方ヨ  
も指支候得ハマして於 天朝候てハ被爲惱 叡慮候も御至當ミ御  
事と奉恭察候扱先日指出候書取ニテハ 公邊ニ於て御不都合ニ相成と  
の御事ニテ認直し候様ニとの儀承知仕候何分ニも 公邊御都合よろし

き様認可申儀ニ候得共御懐合相分り兼候得ハ彼是懸念致候此度ニ儀ハ  
 日本御一大事ニテ不容易誠ニ以御案し申上候故愚意安し兼候件々左  
 ニ認内々各方迄申遣候然る所口上と違ひ書取候得ハ何と欵角立殊ニ不  
 文ニテ筆廻り兼候得ハ過言ニ出不敬ニ涉候様ニ儀も可有之候得共畢竟  
 公邊御爲を深く存入候得ハこそ不憚忌諱認候マテ 徳川家御不爲  
 相成候をも傍觀致居候心得マ候ハ元よりケ様ニ事も不申出候間其段  
 何分御海恕マテ各方并ニ海防掛りの勿論何御役人とても天下ニ御爲不  
 存候者ハ無之候得ハ廣く御懸ケニマテ御廟算ニ所伺申度御廟算伺候上  
 ハ 公邊ニ御爲日夜憂苦致候所御安心申候故何分御都合宜敷様可認候  
 へ之御繁多ニハ可有之候得共否御付札マテかりとも草々御答待入候也

六月九日

水戸隠士

井伊掃部頭殿  
 堀田備中守殿

松平伊賀守殿  
 久世大和守殿  
 内藤紀伊守殿  
 脇坂中務大輔殿

二白 公邊御爲ハ則天下ニ御爲可被奉安 叡慮との御譯ニテ御廟算伺  
 安心仕候上ニハ各方初御相談ニ上案文被下候ても宜敷早速認候て可指  
 出候 天下ニ御爲 徳川家ニ御爲マシテ愚存無他候不盡  
 一 舊冬墨夷より申立應接ニ上條約御取極ニ相成交易ニ利を以御武備御  
 整可被遊御趣意ニ様ニも伺及候所此方御武備御手厚き上より御初ニ相  
 成候得ハ交易も御益ニ可相成候へ共此方御武備御手薄ニ付彼ノ願意御  
 破り被成ウニク無御據御初ニ相成候交易マテ御益ニ所も如何可有之や  
 最初御益ニ様ニテも尙又彼より追々深く喰入申候と交易ニ御益を以御武  
 備整ふと何レ欵早く可有之や

但シケ様申候ての交易の一切不宜候と申様聞へ候得共左様ニ無之方今ミ勢二百年前通り鎖國との相成兼候義ニて交易も無御據候得共主客ミ勢を不取失様致度被存候尙又開港ミ場所よて賣買ミ爲彼我ガ商税御取立ニて五十萬三十萬ミ運上上り候て御益ミ様ニ候得共外國必用ミ品出候得の内地ミ品の少く相成品少く相成候得の價貴く相成の必然ミ勢ニ可有之左まれの内地ミ者の益窮し候故一旦上り候眼前ミ御益のともかくも日本國中窮し候得の矢張 公邊ミ御不爲ニ至り可申や左候得の彼よりの交易を大きく御開ミ儀申候得共拙老愚見ニての幾重も少さく致置度事と存候尙又必内地ミ品を以て交易不致候とも他邦ミ持來り品を又他邦へ送り利を納候術も有之由候得共主客ミ勢を失候ての御行届ミ程如何と存候

一夷狄ミ願を御濟セ無之候得の各國申合攻來り候も難計との儀ニ候野口よての直ニ攻懸り候様ニも可申候得共話よて聞圖よて見候計よての容

易ニ内地への入申間敷や當分平穩ニ致居候得共直交易邪教ニて内地ミ人を懐け地理人情を諳熟し候上兵端を開き候ハ彌危うるべく候間御廟算有之度事

但切支丹本尊ミ儀の子共へ乳を與候も又磔ニ相成候も有之よしよて外見の大ニ相違ニ候得共其術ニ至候ての同様ニて先年渡り候幻術を行候由ニ候得共右幻術の方便ミ爲ニて此方ニて折々僧侶山伏杯狐を使候て祈禱ニ志るし有之とて人を欺き候位ミ事よて方今の開け候への少々も志有之者の右幼法幻カニ欺れ候者も有之間敷候得共追々邪教を以諸國を奪候の金銀財寶を初總て自國ガ費を不厭持來り人ニ與へ又の病難ミ者への藥を遣謝禮を不受杯申如く表向の仁惠と存候て見セ候得の一ツも咎候事も不相成仁惠と存候て人々も歸伏致候所半過懐ケ候上よの彼より大軍を渡し内地の者の右ニ應して其國を奪候故甚易く被奪候よし其國を奪候上の最初ニ遣し置候金銀等の自分物ニ候

得の費を不厭惠み申候よし故此所早く御洞察にて 日本も右様不相成様被遊度存候

一 ミニストルを指置候儀の萬事を統攝し外國事務宰相へ直懸合致候旨申候所右様相成候ての貿易等外國へ拘り候他の事よても彼等う不便ニ存候事の如何様より辭を作り直ニ御變革を願候様ニも可相成後害不可測候滿清阿片ミ亂も北京ヨミニストル居候の、扱方も可有之旨申立候得共滿清よて北京へ不指置所よも亦意味可有之候への得ト清國ミ所置を御吟味ミ上ニ被遊候方可然此度直ニ此度直ニ御定と申も如何可有之や得ト御廟算有之度事

一 數港を開く事ミ願の墨夷計ニ候や又の諸夷來り墨夷と同港よての指支候杯申出候節の又別港を開き給ふ御調ニ候や 昨年十二月御渡ミ御書附ミ度ニ條約願ふ者よ及みさん云々認數へ舉る國十餘國有之所其國々皆來ル日ニ至らへ別港又ハ別事願出候事ハ指見ミ事ニ被存候 若左様よも有之候の、公邊御領ミ港ミ外の御許容無之との存候得共其願よ寄

諸大名領分中ミ港迄も御引上ケニ相成候御合ニ可有之や右御引上ケニ相成候上の其大名難有奉存候程ニ被下候儀と存候所港ミ御益の申さの當坐物土地ミ御益の永世ミ御益ニ候得の多く右ミ類出來候の、追々公邊ミ相成間敷や夷狄よて好み候程ミ港の船かゝり等も極宜敷港と存候への領主も惜み可申又の領主々々自分にて交易致候の、人々も与り可申候得共如何様ニ弊可生も難計扱又數港を開きミニストルを置直交易致し切支丹寺を立内地の人を懷ケ置諸夷申合四方八方より一時よ起り立候の、其節の余程御手張ニ可相成やと懸念致候所右様ミ節ミ御廟算有之度候事

此節道路ミ説にて承り候得の蘭夷より兵庫と下の關へ港を開き貿易を致し且兩港ミ間よて海軍總練ミ傳授を致度旨願出候との事實否の元より不存候得共數年服從ミ蘭夷ミ右ミ勢ニ候得の諸夷より各一層二層と願立候の必然ニ可有之候此節諸蠻の何レも墨夷ミ御扱を如

何と熟察致居候半被存候所墨夷御所置御決し上よの諸蠻よりも色々難題申立候の眼前ニ有之扱諸蠻内地へ入込候上の一墨夷を御所置被遊候よりの益六ヶ敷候半申迄も無之事ニ候得共甚過憂致候

一 邪教拜所ミ儀も夷狄ミ商館中へ立置夷狄のみ拜候の無御構との思召ニ可有御坐候得共近來切支丹の邪教の無之と申説蘭學者申觸し候得の諸大名初心得違 公邊ニテ踏繪の御廢切支丹拜所建立の御許ニ相成候故惡敷の無之杯申様相成追々信し候事ニ至り昔の大友小西の如き者出來其節ニ相成不宜と御心被爲付御禁し可被遊と思召候とも御行届ニ相成可申や否信長杯も後悔いし候様子ニ候得の篤ト御廟算有之度候事

我國よて罪ふる者右商館中ミ邪教所へ逃レ入候者等出來指出し候様被命候節一命御助け被下候の、指出可申杯申事ニ相成それを強て罪し候得の却て外國の親を破る杯申様ニ至り候の、刑を正し候事も不

叶右ミ罪人の夷狄邪教寺の恩を以命を助り候と申事ニ可相成候得の益邪教傳染ミ思可有之やと甚心配いし候今惡事有之候へハ死刑ニ相候様ニ成候てハ益惡者不恐多相成可申候

一 遊歩ミ事も開港ミ地のみよも候の、可然無限所ミ遊歩と相成候ての必突當り出來可申のみかす内ミ模様も相分後害多端ニ可有之候交易さへ出來候の、開港ミ場のみ致候て随分彼う養生ニの相成可申候得の豫め後害無之様御廟算有之度事 去ル寅年横濱滯船中も種々不法有之由ニ候ハハ無限遊歩ミ相成候ハハ色々突當り出來

一 交易御初ニ相成候の、此方々の武器類の勿論武用ニ相成候品は一切不遣彼々の大小砲銅鐵錫鉛とふん并有用ミ書籍の類のみ御取入武器ニ無用ミ品は一切入さる様被成候の、彼う膽ニ響き候故何程表向の平穩ニ被成候ても夷狄も恐レ可申假令表向武を張様被成候共無益の品を入有用ミ器械産物を被出候時の彼う侮を受ケ可申候得の蘭夷ミ交易迄も右



ミ様ニ<sup>ハ</sup><sub>ハ</sub>得<sup>ル</sup>ク<sup>ニ</sup>御廟算有<sup>ル</sup>之度事

本文ミ儀何程嚴制御立ニ相成候ても直交易御許ニ相成候てハ必奸商共より濫出ミ憂可有之候又統ニても六連八連之小銃ヲ如キハ海防ノ用ニ不相成内地惡者持候得ハ以テ外御禁シ可然

一 ミニストルを指置并交易切支丹寺建立ミ儀是皆人をあつけ候術ニて此三ツハ彼ニ在てハ尤肝要ミ術我ニ在てハ尤以大害とそんし候只開港ミ場へ船を寄交易いふし双方ミ有無を通候迄ハ害も薄く候得共右三ヶ条ハ日本を奪の術顯然ニて自余ミ儀と違ひ此上再三御申立ニて 朝廷ニても御許容被遊御取掛ニ相成候ても能御模通ニ可相成や否何共見極兼候假令御取掛ニ相成候ても萬一御六ヶ敷相成候ハ内地ミ人ハ不奉服外夷よりハ強て申立候様相成意外ミ奇禍を醸し候半苦心ニ不堪候一寸其一端を申候ハ、邪教寺ミ事等ハ内地ミ僧侶初六ヶ敷候半先年夷狄防禦ミ爲梵鐘を以大小砲ニ被遊候との儀御正道ニて官符迄も被下候所それさへ出家より云々よて今以其儘ニ相成候ハ全く僧侶騒立候事ニ候

得之檀家迄よも及候半との 御懸念と推察仕候所右様 日本ミ御爲を不存無分別ミ出家共ハ論ニ不及候得共中よハ御正道相分り候者ハ出家よりとも左のみ惜み申間敷候所それさ僧侶ハ云々申候得ハ官符ニて被仰出候事さへ行れすよして切支丹ミ儀ハ 東照宮御初三代將軍家ミ御英明ニて後來迄をも御見通被遊御嚴禁被仰出神官及び八宗へも嚴重被命居候事ニ候へハ萬一諸國合併ニて蜂起し強訴等致御取上ケニ不相成候得ハ邪教寺破却杯申事よも至り可申候左候時ハ大小名ニ被命候狀御人數を以御取靜も可被遊候得共其上よも命を奉し不申候節ハ事ニ寄是非干戈を用候事ニも至候半僧侶ハ戰爭ニ相成候てハ勝利無之とも兵端を本ハ候得共夷狄ノ願方事起僧侶よりさも日 朝廷よても再三ミ御申立故本ノ人ヲ被殺候てハ如何ミとの可有御座や

御許ニ相成候得共如何致候や杯御察當ニも相成候ハ、公邊ミ思召との大ニ齟齬可致や致推察候されハ只今ミ内幾重よも御廟算有之度候事一卅年前ハ拙老事横文字學ミ流行ハ切支丹ミ媒と申置候所果して追々ミ

模様を見るは横文字を學候者の切支丹を惡敷との不存様相成候乍併只  
 今と相成候ての一圓は止候事も相成間敷候得と蕃書調所を二ヶ所ニ被  
 遊 書カ 公邊ニて御用ニ相成候何人と御定 當時之天方之御 扱ニ准し可然款 御 まで兩所ニ被  
 蕃所調所ニ御指置たとへん東ニ調所ニて和解致候分西の調所ニて改西  
 まで和解いさし候分東ニて改候と申如く致し和解出來候は、原本の不  
 殘御目附方へ指出し燒捨ニ相成右和解書板ニ被遊又大名も蕃所不  
 不殘爲指出和解被仰付原本の即ち御燒捨指出候丈ケミ御報の相應ニ被  
 下置可然扱又大名も家ニ應し貳人と欵三人と欵洋學者ミ人數を定猥  
 ニ不學様被仰付其他長崎等譯官ミ外天下ミ人の洋學いさし候儀御禁し  
 まで可然如何とかれの豪民等洋學を信し萬一野心を生し夷狄と申合候  
 者有之時の實以不容易事天草ミ亂も繼可申候への早く御禁し可然御  
 廟算有之度事

一 一体夷狄を近付不申様よと有之 東照宮御初御代々ミ御旨意の御正道

ニ有之右を變革御近付と申の當時不得已御權道と奉察候得の内地ミ者  
 ニ不服ミ者無之との難申萬一内より事起候時の御扱ニ御指支ミ儀も出  
 來可申や左候得の内憂外患何レ欵早く可有之や御廟算有之度事

本根實し居候への假令夷狄ニて兵端を開うんとしても直ニ内地ニ入  
 候事ハ難うるへく運米を妨又ハ離レ島を奪候様ミ事ニ可有之其節本  
 根恙候ハ、枝葉ハ被切候ても又本根より萌芽を生し候道理まで内さ  
 へ整居候ハ、施策も可有之候得共本根傷居候てハ繁茂ミ期の有之間  
 敷候されハ今ミ内本根御培養ミ御手段ハ、まほしく候

一 墨夷始諸夷よりミ願追々御濟セミ上の萬々一 朝廷より品々御好出  
 候も難奉計候所防禦ミ御手當御行届ニ不相成程ミ御砌それも是もとの  
 難被遊も勿論ニ候得共御上洛杯ミ如きの君臣ミ大義ニて 東照宮初度  
 々被遊候御事ニて夷狄ミ願ハ先例無之も御許 御主君カミ 勅命ハ  
 御先縱有之事も御斷との被遊兼候半又諸大名も種々願立可有之も難

計旁御廟算有之度候事

一御大變革御ケ條ニ事摠テ 日本御爲宜敷様御變革ハ御尤ニ候得共夷狄  
 ミ願ヨリ萬一枉テ彼ウ爲ニ重キ 御祖法を御變革ニ相成儀ニテハ大  
 名等も自分ノミ勝手ニ相成候儀願出候も難計前ヨも認候通 天朝  
 よりミ 勅命大名カミ歎願も御義理合ニテ無御據御濟セ無之候テハ  
 不相成様罷成候所右ニテ 公邊御爲如何可有之や御廟算有之度候事  
 一叡慮を被奉安候御儀トヘハ紀淡カ内ヘ入候儀并鳥羽港ハ 伊勢神宮  
 ニ近く候得ハ是等をハ幾重ヨも御斷ニ相成五畿内近くヘハ不參様ニ被  
 遊ミニストル指置直交易切支丹建立杯ミ代リニ無御故障場所マテ三港  
 位ハ御濟セマテも前文御濟セヨリハヨシ可申ヤ右様相成候トモ彼ウ  
 益ヨ相成候事ハ數多有之候得ハ彼ヨリ兵端も開キ申間敷候尤御益進ニ  
 致候得ハ關夷杯誘來候も難計候得共夫ニ恐れ後害ニ相成候事迄爲御濟  
 ニ相成候テハ尙以御威光ニ拘リ候得ハ不成事ハ不成由幾重ヨも御斷可

關夷ハ諸夷ニ  
 ノ事ナリ  
 校訂者識

然候よく御廟算有之度候事

人心不居合候得ハ居合候迄ハ交易一ト通り迄ニ致シ十五年ウ廿年の  
 後人ニ交易ミ利を好候ハ居リ合可申其節トモかくも可致ト期限を  
 延シ其内御武備御手厚ニ被遊候儀肝要ニ可有之候且應接ミ模様ニ寄  
 汝ハ萬國普通ミ法ケ様ノ又世界萬國ニ例無之杯種々申張候得共第  
 一合衆國マテ大統領ミ位を年限を以輪番ニ勤居候杯も萬國ニ例ニ有  
 之間敷我國ハ封建マテ土地も大名ヘ預ケ置候事マテ交易ミ利も萬國  
 ミ如ク廣ク致候事ニ相成兼候杯其場ニ臨ミ斷リ方ハ何程も可有之や  
 ニ被存候杯又御斷ミ節彼直ニ屈服致候得ハ外口無之候得共定テ今更  
 右様御斷ニテハ本國ヘ復命致兼候杯申張候ハ指見ミ事ニ候間其節ハ  
 汝ウ主命を重シルハ尤ホリ併此方も又主命故斷候外無之併汝ウ志も  
 御察シ被遊候間本國ヘ御使被遣候汝ウ主命を辱めムルヨ非ス此方ハ  
 此方ミ思召を以御斷ニ相成候付無心配引取候様被命アメリカハ御使

ニて御斷ニ相成候ハ、御威光も相立ハルリスへも面目を不爲失旁可  
然被遊被存候扱其御使ハ至極重役ニ候へ共數萬ミ御旗本ニ其任ニ  
當リ候者數多可有之候得ハ非常ニ御拔擢ニ御任ニて被遣彼ヘルリヤ  
ハルリスの上ニ出候程ニ必死ミ力を盡し候ハ、彼も承伏可仕主客ミ  
勢も定リ可申ヤ

一古き記録を見候ても秀吉ハ勿論 東照宮よても 朝廷へハ殊ミ外御親  
敷被遊 台徳公よも姫君迄御入内も被遊候得ハ御親敷事ト奉恭察候  
大猷公迄ハ御上洛も被遊候所其後ハ如何様ミ御意味合ハ承知不奉候  
得共御遠々敷相成候處何分 朝廷をハ御尊敬且御親敷被遊候方 公  
邊ミ御爲可然ト乍恐奉存候且 京坂ミ御備ハ何卒御手厚ニ被成遣候様  
致度候只今ミ姿ニて萬一明日よも如先年夷狄大坂へ乘入内地を劫し候  
爲大砲よても打懸候ハ、御所ニ於て 江戸へ被仰遣候御間もかくて  
直ニ大名へ可被命も難計候所左様相成候得ハ 公邊御爲ニ不相成候故

先近畿ミ大名へ被仰付非常ニ節ハ早速人數指出し次第ニ寄主人迄も出  
馬致候様被成置又畿外ニても程遠き者へハ模様ニ寄人數并出馬も致候  
様御達ニ相成洛外河攝ハ入口へ二三ヶ所も陣屋御出來常ニ番兵指置候  
様坏被遊候方可然ヤと奉存候尙宜敷御勘考ニ致度候扱右様大名へも兼  
て御内達有之萬一ニ節ハ右ミ内達ニ相成居候大名へ直ニ所司代カそれ  
ハ相達候様ニと申奉書を兼て被遣ニ相成居候ハ、御手の廻リ候所を  
天朝ニ於ても御満悦ニ被思召候半左候得ハ火急ニ節も 御所カ直ニ  
大名ニ被命候様ミ御不都合ミ儀有之間敷候間早速御廟算有之度候事  
右件々憂慮ミ余思出候ヤハ、認候素より倫次もかく体裁もこれカ  
候間其文を捨其意を御汲取ニ致度候其他繁文縟節を省き太平ミ習  
俗を一掃し武備專一ニ御仕向ケ天下ミ人心を一振致候事等短文ニ盡  
し難く候故全く方今指向ミ所を致慮候

源をよみさしと思ふ人かくハ誰よりいそん水のこゝろ哉

安政五年八月關東へ被仰進候 勅書但傳奏所 京都御附大久保伊勢守へ御渡

先般墨夷假條約無異議次第にて於神奈川調印使節へ被相渡候儀尙更委細間部下總守上京可被及言上由ニ候得共先達 勅意諸大名衆議被聞召度被仰出候詮も無之儀誠ニ 皇國重大ニ儀調印後言上 大樹公 叡慮御伺ニ御趣意不相立 勅意ニ御次第ニ相背輕卒ニ取計 大樹公賢明ニ所司ニ心得如何と御不審被思召候右様ニ次第にてハ蠻夷ニ儀ハ暫く指置方今御國內ニ治亂如何と更ニ深く被惱  
叡慮候何卒公武御實精を盡し御合体永久安全ニ様ニと偏ニ被思召候三家或ハ大老上京被仰出候所水戸尾張共慎中ニ儀被思召且其宗室ニ内も同様御沙汰ニ由も被聞召及右ハ何等ニ罪狀ニ候や難計候得共柳營羽翼ニ面々當今外夷追々入津不容易ニ時節人心ニ歸向も可相拘旁被惱  
宸襟候兼て三家以下諸大名衆議被聞召度被仰出候ハ全く永世安全 公武

御合体ニ被安 叡慮候様被思召候外夷計ニ儀も無之内有之候てハ憂脱カ殊更深く被惱 宸襟彼是國家ニ大事ニ候間大老閣老其他三家三卿家門列席外様譜代共一同群議評定有之誠忠ニ心を以得ト相正し國內治平公武御合体彌長久ニ様 徳川家扶助有之内を整へ外夷ニ悔りを不受様よと被思召候早々可致商議 勅答候事

廣橋 大納言

萬里小路大納言

御沙汰ニ趣尋常ニ御事ニ候得ハ御斟酌ニ御次第可被爲在候得共蠻夷ニ事件於關東も大改革ニ御時節ニ候へハ萬一此上公武御隔心ケ間敷有之候てハ甚以被惱 叡慮候間格別ニ儀を以無御隔心被仰進候間此段不惡御聞取ニ相成候様被遊度御沙汰ニ事

八月

今度被仰進候趣三家始相心得候様別段水戸中納言へも被仰下候此段爲御心得申入候事

同年同月水戸家へ被仰下候 勅書

先般墨夷云々文言前ニ同し

別紙

勅諭ニ趣被仰進候右ハ國家ニ大事ハ勿論 徳川家を御扶助ニ思召ニ候間會議有之御安全ニ様可有勘考旨出格ニ思召を以被仰出候間尙同列ニ方々三家々門ニ衆以上隠居ニ至る迄列藩一同へも御趣意相心得候様向々へも傳達可有之被仰出候事

八月八日於傳奏月番萬里小路殿里亭諸大名筆頭ニ依て水戸殿留守居鶉飼吉左衛門呼出御渡

柚門高松の應接

午十二月十六日矢野唯之一同中山太夫與三左衛門御呼出し今日御前へ罷出候

所頭取兩人罷登候由幸ニ事故國ニ事情讚岐守へも存分ニ申述爲聞候様尙更御尋人ニ事も有体爲申との 尊慮ニ被爲在候間御程次第可罷出旨御内達御坐候間私儀ハ支封君へ御出入ニ儀少々論も有之指支候旨申上候所尊慮ニ御坐候間御辭退も不相成矢張存分事情申上候様云々矢野ハ元來罷出御國政向申上度趣御國よりミ論ニ有之暮時相引候所別紙ニ通讚州様より來ル

以手紙致啓上候甚寒ニ節愈御安康御勤被成珍重ニ御儀ニ奉存候然ハ讚岐守様御逢被成度儀御坐候間明十八日晝後御出懸御坐候様ニ被成度思召ニ候右ニ趣認上候様よと被仰付候此段得貴意度如此御坐候以上

十二月十七日

高橋多一郎様  
田中七郎  
數越六郎衛門  
中村丹下

即刻右返書遣し此夜中山殿へ云々指支候趣申出候所御側御用人共々書面有之今晚彼是も如何故可罷出旨御申付此夜金孫<sub>金子孫</sub>等大意相談翌日罷出申候晝時罷出御側御用人中村丹下數越六郎衛門罷出度々應對直ニ被爲召候間再三辭退ニ上御一間へ入候多一郎儀の送候事も有之様ニ覺候旨被仰候間私共御國勝手よて折々罷出不申候間とふく不奉得拜顔候今日被爲召難有仕合奉存候

候扱御國許の今以騒立候や

袖七月五日被仰出候一條於我々共も甚以奉恐入候事ニ御坐候今日も中納言様よりも御事許事情有体ニ申上候様被仰付候間寔ニ田舎者不願恐申上候間何分御高許蒙度云々只騒立候儀の無御坐候七月被仰出候一件如何被思召候や前中納言様御一代十五六ヶ年之間再度御無實ニ御罪被爲蒙當中納言様よの今以御登城御指留被爲在御國許ニ人氣よての天朝公邊ニ御爲ニ御盡し被遊ケ様嚴重被仰出候筈の御坐間敷何御罪ニ可有之や扱々殘念と申一念あり固り百姓町人坊主等ニ至る

迄嘆願書等指出し何レも人心居り合不申候是非殿様ニ御無罪晴し不申候ての不相成と存詰既ニ九月御府内并小新宿迄も數百人罷出候間役人共押留やふく押返し申候恐入候事ニ御坐候且將軍宣下ニ御大禮ニ御登城も不被爲在候ての尙々此上如何と苦心仕居候所へ御行列付賣步行候所御國迄持下り中納言様御名前無御坐候を女子供迄殘念あり神社等へ百度參り仕社前ニ木の葉澤山よたまり申候事ニ御坐候是の一度一枚と數を取候故に御坐候此寒夜に神社ニ夜籠斷食仕候下々の人氣よて水府御領中末々迄ニ忠實ニ存詰候情狀御憐察可被遊猥ニ騒立候儀ニ無御坐候

シテ我屋敷杯へ大勢押込候儀の有之間敷や水府の者女子供迄ナゼ我等を恨み候や

乍恐申上候七月以來のさ々様よの御幅廣く御登城被遊公邊御役方并水野竹腰等へ御引組御本家様ケ様被爲成候儀を何とも不被爲思召却

て彼是御立入御世話被爲在候儀扱々と奉存候尤御宜敷御筋合ニ御坐候  
ハ可奉願所ニ御坐候得共左様計も無御坐候乍恐 神君ミ御尊靈ハ  
勿論 源威義源英公へ御對被遊それ御心能御人情ハ如何ミ物ニ可有  
之や御連枝様ミ内も此方様ハ御一家御同様ミ御家ニ御坐候得ハ御面  
目ニ御拘リ可被遊御儀と下々ミ者迄御批判且御怨みも申上候情合ニ相  
成候事ニ御坐候

御顔色お赤く被爲成我々、決して御本家ミ事見るくまの何のと申事  
ハ無之そ其方扱よく心得て吳よ朔日御大禮御登城無之故實ニ世上へ面目  
も無之大學扱もそふ申たり扱それとて我屋敷へ押込ハ致間敷や  
今月三日四日方より御家中末々迄悲憤ニ堪うね田舎者ミ事故一圖も存  
詰御番頭始神發流門人并文武指籠等何レも門弟大勢有之候所日夜會合  
執三宅へ罷越 兩君ミ御冤罪御嘆願御打捨可被成筈無之畢竟江水御役  
人方存入薄き故傍觀被成候間我々南上 幕府并讃侯へ罷出存意申述

君冤をも訴可申とて四日計ハ夜も寝不申位故兩執政罷登候筈ト達指出  
し先我々共それハ罷登取靜候事ニ御坐候

成程御國ミ情ハ左様も有るへき款又江戸表ハ公邊向左様ニ不參扱々困  
る織部與三左衛門扱度々逢申候故我等ミ事も分り候や九月中小金ミ様ミ  
事有之てハ益御爲よあふぬそ此節百姓共扱大勢罷出候ハ無之や

御定ミ通り御坐候織部等罷出御程も相分り申候得共水戸表扱よてハ御  
出入申上候儀甚以不氣服ニ御坐候百姓共大勢罷出候様被思召候へ共御  
領中五百何十ヶ村と申事よて一村より村役ニ懸り不申候郷士等ミ者一  
村壹兩人ツ、城下へ罷出事情承り候所出入よてハ一村ミ出替り七八人  
よも相成一兩日ハ咄合歸村仕候故大圖上町計も三四千人ツ、おふハ  
仕罷在是も役人共理解申聞右様村役無之者指出候間余ハ不殘と申振九  
月中申諭よふハ右様相成候儀ニて眞ミ慎實申上候得ハ御納得も可被  
遊事ニ御坐候左も無之候ハ何程款押出し恐入候事ニ御坐候



御國より大臣杯罷出度々 公邊へも罷出又の我等も逢候方情實相通し御國取静よも可宜や浮説計被行扱々困る云々

此度も鳥居瀬兵衛肥田其太郎罷登候事よ御坐候此節其太郎著仕候是のふかゝ様ミ御家老半兵衛同苗ニ御坐候御先祖様ミ御時和泉と申者ミ惣領の此方様へ御奉公申上候其太郎家の代々任官も仕候

それの介と申候悴欵何役ニ候や

左様ニ御坐候若年寄相勤申候

浮説ミ有之よの扱々困る先達の屋敷へ押込と申事よて大きよ心配致候也浮説ミ儀追々御配慮奉恐入候七月末比よの何レミ屋敷より欵水戸様御謀反くくと申事よて世上ミ口への手も被當不申候得共御家中一統残念骨髓ニ徹し申候所廿八日御達よの大目付御目附駒込へ見廻り尙御連枝様方御引受諸事水野土佐守竹腰兵部少輔等御申合立入取扱候旨云々其節間部殿御口達よの 前中納言様御事突留候御證據の無御坐候得共風

聞不宜候間 御三家方ミ御取扱ニの無之候得共右様被仰出候所御國靜謐よさへ有之候得の御憤も御解ニ相成候間其旨相心得候様御口達書相渡一同痛憤仕候翌朝御家老共より存意書御老中方へ指出申候然る所八月朔日ニ相成 駒込詰ミ御家中引拂御連枝様御家中 駒込へ詰切 前中納言様御預切ニ可相成由營中取沙汰有之儀ニ一同驚き 中納言様よも 御父様ミ御事故御憤激被遊御家中半分 駒込へ相詰若殿中へ立入候の切死ミ覺悟よて相詰申候所此夕此方様より御使武田彦衛門田澤彌之進被爲召大目付等立入ミ儀の御沙汰止ミ趣ニて一同も先安心仕候公邊より被仰出候儀何一ツ御取用不被爲在候故我々も 公邊へ向骨折候よ指支申候大宰等ミ族どふり指出申度者也

此儀の 中納言様よりも度々御下知被爲在御國許よても精々嚴重尋方申付置候得共御承知も被爲在間敷水戸御領内の海岸二十四五里那珂湊と申所の日々諸國ミ商船出入致又一國ニ大筋ミ海道四五筋有之是の奥

州野州總州へミ通り又湖水舟路も接居余國と違ひ四方明ぬきよて往來  
勝手よ御坐候間今日居候ても明日他參も難計且出奔人ミ事尙更彼等下  
郎輩ミ事左迄御配慮よ及申間敷奉存候出奔致候者ハ親殺し主殺しよ  
ても捕得不申候者天下ニ數多御坐候それ程御尋者ニ御坐候得ハ公邊  
より捕手ミ役人并此方様御近臣小石川よりも指出し水戸表軒別ニ爲尋  
候ハ相分り可申候それよて見付不申候ハ公邊へミ御申譯も有之  
候間左様奉願度奉存候 中納言様へも右様申上置候事よ御坐候  
石見丹波ミ事ハ如何いふし候儀ニ候や

是ハ追々御家老共より申上候通只今御引出被成候てハ一國人心居り合  
不申候且石見守儀ハ御用方更ニ好不申候昨年中より隠居願指出罷在候  
事ニ御坐候藏人間柄故是へ御尋よても相分り申候丹波儀ハ今以慎中よ  
ハ有之尙更此度ミ御國難よも結派と此一類計ハ嘆願處よハ無之内々人  
集杯いふし追々不宜取沙汰も有之候尤太田家ハ水戸家へハ御由緒も有

之格別ミ事故先年減祿被仰付候節家格ハ御沙汰無之候間忝專吉宜敷出  
來候ハ追々家格ハ被下置候儀と奉存候丹波杯只今指出し候ハ太田  
家ミ存亡難計様奉存候

我ハ天狗を不殘追こき結城派を揚度と申存寄ハ一切おきそ一同へもそふ  
申セ

左様ニ御坐候水戸御家中廣き事誰ウケ様誰ハケ様と申儀御承知被遊候  
筈も無之七月中水戸ハ御聞よ入候儀御取用不被成と申御返翰も御内々  
拜見仕候扱此度ミ御厄難ハ何レより起候と被思召候や御急登 城ミ事  
も御違 勅云々ニハ御坐候得共右以前より結派丹波ミ余類打寄不遠云  
々既ニ小山藤田宅へハ六月末ニ何レミ家中欵兩人參り 公邊御懷ミ儀  
あらし水戸へハ七月七日朝相分り候節ハ右ミ黨類とふよ存居候よし沙  
汰も御坐候位よて無根ミ浮説内より焚出し候様有之候てハ大變ニ御坐  
候

イヤ決して我の御國ミ事よの不構候

辰二月中谷田部藤七郎等横山兵藏根本新八等此方様御家臣衆へ深く相詰の次第且廿六日 兩公御鷹野出御前後ミ御事の御承知被遊候御儀と奉存候

太宰壹人も指出し候の、御吉兆ミ儀も何と坎可被仰出とも存候

太宰出奔等ミ儀の七月五日後ミ事よて御咎一條も何も障り候次第の無之様奉存候太宰探索嚴重ニ仕候付色々者召捕間よの少々御家臣ミ名杯も出候儀も有之やニ御坐候萬々一御家臣衆より結派丹派等へ内文通ニても有之候ての此方様御爲ニ不相成右様ミ儀よての水府の益治り不申候此上此方様を御怨申上候間此段御本家ミ御爲故よく御心得被遊候様云々

其許杯へ逢候得の格別分り申候浮説計多く有之互ニ爲ニ不相成候間水戸の登り申候大臣への我々も逢老中衆へも爲指出候の、又 公邊向模様水

戸よて心得候と違候所も有之爲吞込候の、取静ミ爲も可然坎

御定ミ通りニ御坐候肥田其太郎罷登候間御目通可申上儀と奉存候扱先日金子孫次郎と郡奉行罷登候節長持ち重き敵武器よても運申候半との御疑念被爲在 公邊より段々御響御坐候よし此節大笑仕候何程水戸家小國ありとて孫次郎の長持へ旗具一同取交入候とて何程といり可申候や武器爲登度存候への先格ミ通鐵砲甲冑かり修復入替旁御矢倉奉行印鑑よてづんづん爲登候事ニ御坐候浮説を御信し被遊候とてゐんまりニ御坐候却て水戸表其様ミ事よて人氣相立尙々一圖よ存詰候忠義一片ミ者御不審蒙候所を残念あり申候事ニ御坐候

とふ坎浮説を不信様ニ致度

追々御不審蒙り又の根もなき事 公邊向よて御信用故畢竟説も入やすくそれ故 水戸表ミ人氣決して不治心配仕候御老中衆へ御引合被成下候の、御不審被爲在候段の力丈ケの説き申度それも御六ヶ敷候の、

公用人ミ内へ面會御不審ミ廉一々辨論いし候得の御宗室と御三家ミ御中も御直り被遊詰り天下ミ御爲と奉存候

成程その様ミ事も有之候の、互ニ浮説を信し右様ミ事も及申間敷それのよき心付あり何卒御國表靜ニ致度又小金ミ様ミ事有之候ての夫丈ケ御登城も御延引ニ相成候故御爲と存候の、靜ニ爲致候様云々

江水役人共追々骨折取鎮仕候得共大勢ミ事故中、行届不申候恐入候事ニ御坐候御番頭等の時々寄合評議有之右ミ組子數百人有之尙又神發流指南福地政次郎門弟郷迄よて三四百人も有之其内打手と申の何レも少壯ミ者ニ御坐候其外會澤青山等學問ミ門人御家中子弟等一圖ニ存詰こらへ兼日夜執三宅へ推參致役人共身を捨嘆願不致故、兩公御恥辱をも雪候儀難相成云々責付られ候所、公邊御模様件ミ通騷候得の騷候程不宜候事故中ニ立らみ立られ致方無之立場故嘆願引受執三罷登候事ニ御坐候、水戸表ミ眞情の御老中衆へも爲御聞申度と役人共申合候事ニ

御坐候

我等も朔日御登、城もかき故世上へ面目も無之候間何分骨折候積あり外ニ工風も無之候得共尾紀様より表向御吹掛ケ有之候の、諸向も其尾ニ付口出し御登ミ儀の御出來ニ相成候様被存候御慎ミ儀の、尾越へ御引張故段々ニ無之ての參間敷とも存候

左迄御心付被爲在候御事ニ候得の、さう様御周旋被遊候様仕度御一ト廉も御眞事顯れ不申候故矢張士民とも御怨申上候事ニ御坐候、幾重も盡力致候間其方等も盡し可申候

御意無之候とも只能在候ての、水戸表動立申候故乍不及盡力仕候、前中納言様よの今以御上下被爲召嚴重御慎雨戸も少々御せりし被遊候御事故、中納言様も御苦勞ニ被遊我等のとも、この様ニ慎よくせる事の中、出来ぬ萬一御疾よても出候ての恐入との御意よて七月中も御慎云々炎暑中云々御連枝様方へ御直ニ被仰候儀も御坐候、御子様ミ御情

も御察し可被遊候御暇願一間へ退候所まぶくと被遊候間又罷出候得

上へ懸り候儀の無之欵と心配致候  
鶴飼吉左門近々罷下候由御吟味もても始り申候得の 前中納言様御身之

此儀ニ於て一切御掛障無御坐事ニ御坐候  
何欵御直書もて出候儀も無之や

御意ニ通ニ御坐候是の當時町奉行所御引揚之由ニ承候所外之御次第も  
無之先年 前中納言様御親御焼乃被遊候御下打之刀被下候節ニ御直書  
外ニ草木ミ種物ミ事もて被爲遣候計ニ御坐候是の何レへ指出候とも曠  
然と仕候物ニ御坐候

それの大きニ安心致候事之

右ニ付申上候此度御吟味物ニ付萬々一穿鑿を固て押付片口を以て御刑  
當御取行も相成候の、それのそのの國家へ關係大なる事故士民一同

おふへ兼可申候と奉存候八月末中御老中太田殿間部殿御呼付御應接之  
間ニ是の 御親子様ニ御間もての申上兼候御儀も御坐候 前中納言様  
も 京都ミ方御引懸りも有之候所明日壹人罷出可申上と申退出被致  
候事ニて右ミ儀 上も御配慮被遊 奥御殿様も御申上 前様御聽  
よも入候や 京都へ引掛り杯一切無之候間明日参り候の、幾重も堀  
ぬけとの 尊慮もて 上も御安心明日又兩人罷出候節嚴重御責御聞  
被遊候得の昨日の左様申上候所 京都ミ御引張の無御坐候只海防御勤  
役中ミ御事ニ御坐候と兩人口を揃て申上候此節政府御近臣も閑居一同  
落涙仕候天下ミ御老中も勤候者一夜之内ニ弁をうへ申上候御強く御堀  
不被遊候得の 京都御引張と申所もて 御父子様ニ御間を御離間申上  
且 三藩ミ君の浮沈ニ拘り候儀をら取繕申上候様もての此上鶴飼等ミ  
穿鑿の如何様固て被押付候も難計御國許一同殘念骨身ニ徹し且 天朝  
へ拘り候儀ニ相成候間其節の意外ミ事ニ可相成も難計此段 徳川家ミ

御爲故御本末ミ御中と申御大切ミ事故御心得ニ申上置候

御聲ひく、御體を御伏し被成初て承れりと被遊左様ミ儀ニ有之狀扱々と御興被爲醒候て御眞實ニ御吞込被遊此後の事如何よも心配いふすそ我等何分よも骨折候間水戸表ミ儀穩ニ致度云々

御意ミ通奉畏候外ニ取靜様無御坐候兩君様御水解御一條のみニ御坐候前中納言様ニも御老年ニ被爲在萬一御慎中朝露ニ御先立被遊候ハ、御家中ハ勿論御領中一統 御亡君ミ御心中奉恐察一旦讒者ミ爲メ無實ミ罪ニ被爲沈御逝去被遊候ハ、臣子ミ身誰歎黙し居可申や淺野内匠頭如きの短氣うつけミ主君よても右浪人とも主君の遺志相繼鬱憤を晴らし申候況や明君元來 天朝公邊ミ御爲御忠節御勵被遊讒言ミ爲ニケ様被爲成御生前ニ御晴ニ不相成御逝去も被遊候ハ、此鬱憤何レへ報し可申や小金宿壯士ミ勢御承知も被爲在候適當もかき腹さへ切申候程ミ忠憤義烈況や一旦決心いふし候ハ、如何様ミ義ニ可及も難計此段ハ御

本末無遁御一門様ミ御儀故事情有体ニ申上候

御子様方ハ如何被成候や

御承知も被爲在候通 民部様ミ外ハ何レも御國ニ被爲入申候御國よても余四鷹様ハ朝々女中もそんし不申様御遠拜相濟 御父兄様ミ御爲諸神を御祈誓被遊候ハ、御慎解等ミ儀頻リニ御苦勞ミ御様子ニ御坐候是よて御暇願退出致申候

又々尋度儀有之節ハ呼申候との御意ニ

秘笈雜錄

二

秘笈御廟算高松

二百四十

晚綠齋祕笈

目次

- 幕府除目
- 越前侯親奎
- 佐嘉侯呈書
- 鯖江侯建議
- 義旅處置
- 幕府令笠間侯書
- 本藩命令及親奎

祕笈雜錄



安政六年午七月六日

丹羽越前守

松平肥後守

右依指圖俄ニ登 城仕候所 尾張様御隠居ニ儀爲上使被遣候

尾張様へ被仰出

尾張中納言殿御事 思召御旨も被爲在候付御隠居被仰出外山屋敷へ居  
住穩便ニ急度御愼可被有之旨被仰出

尾張家御相續ニ儀ハ松平攝津守へ被仰付候

右ニ趣可被申上候尤右ニ段御使を以て可被仰進候所格別ニ御用多ニ  
付御使ハ不被遣候間其段可被申上候

松平肥後守

松平左京大夫

丹羽左京大夫

名 丹羽越前守

尾張中納言殿急速外山屋敷へ云々前件之通壹通

一萬事攝津守殿竹腰兵部少輔成瀬隼人正之無遠慮相伺宜様可被取計候事

右之趣家老衆へ可被申聞候事

右三人へ心得被申渡候書付

市ヶ谷屋敷へ被相越中納言殿へ面談ニ不及旨被仰出候趣竹腰兵部少輔

成瀬隼人正其外家老衆へ可相達候由にて書付兵部少輔隼人正へ被相渡

御受も右之衆罷出申達筈候

一御受之儀の深更も可及候間三人共明日登城候旨可被申聞候

上使 間部下總守

松平和泉守

松平攝津守

右 尾張様御家御相續之儀俄ニ被仰進候

尾張中納言殿家老

竹腰兵部少輔

成瀬隼人正

右一同ニ御縁類ニ呼寄御敷居際迄罷出被仰出候趣紀伊守申渡之兵部少輔も可相越候隼人正の上使之前後も可被付旨申渡之

但松平肥後守松平左京大夫丹羽越前守も著坐

松平攝津守

尾張中納言殿家御相續被仰出候家政向篤ト可被念入旨御意ニ候

刑部卿殿家老

竹田豊前守

德川刑部卿殿御事 思召御旨も被爲在候付當分之内御登 城御見合被成候様被仰出候此段可被申上候

右於芙蓉間掃部頭老中列坐紀伊守申渡之書付相渡之  
右同文言德川刑部卿殿云々被仰出候間田安殿へ可申上旨水野筑後守へ  
於同席同人申渡之

越前侯直筆之寫

今般被仰付候一件ニ付一統之向も可有之候得共我等儀從來丹精を相盡  
候ハ畢竟御家門之身故只管 公邊之御爲と存詰候儀ハ一身之吉凶禍福  
を厭候所存聊以無事ニ候今更般家督之儀無相違日向守へ被下置候上  
ハ益御國內之御治平ハ不及申 公邊永久之御榮誓神明等ニ專祈度存居  
候儀ニ候間家來共ニ於ても心得違不致各其職相守リ我等同様日向守へ  
忠勤相勵候事肝要ニ候萬一感憤ニ堪兼所存等有之候ハ、内心假令忠義  
ニ候共我等所存ニ相叶不申候間何分從來趣意柄等相心得 公邊之儀愈  
略ニ不可致者也

午七月八日

未八月廿七日

德川刑部卿殿御事思召御旨趣有之候付御隱居御慎被仰出候且今迄之御  
領地其儘御付人御抱人ミ者共一橋附被仰出候間向々へ可被相達候

公邊ハ松平肥前守へ參府いし候様内達有之候付申出

私儀八ヶ年以前英吉利人亂妨致候所參府留主ニ付人數不行届百ヶ日御  
訶責を蒙候然る所去年中神奈川小柴村ニ於て蠻國へ假條約被成候節夷  
人共亂妨被致候へ共何等御所置無之先年御訶責蒙候段ハ相當不仕尙  
又此後夷人共國許ニ罷在防禦仕度若參府不仕候て不宜候得ハ長崎御堅  
メ等ハ御免被仰付候様仕度奉願候以上

未正月

松平肥前守

未七月中太田閣老呈書之寫

外國交易之條約開港之場所定約之書規定之所追々己う儘のみ申立御不

都合ミ廉多成行自然御政道ミ障不容易御時節此上異國御處置ミ儀被仰出方可有之候付テハ諸家へ被爲命方猶可有之各方御誠意承度外夷ミ事ニ付第一叡慮不被爲安候程ミ御事御大切ミ御儀且國主外様ミ中ヨモ外國とも御國體を被見透殘念ミ事ト被申候者も有之や相聞御政道難有不奉仰者萬一有之節ハ不平穩外國人申立候所御許容被遊難キ儀數多ミ事故此上應接不相立節ハ御手切ミ御挨拶打拂被仰出候ヨモ御連枝御家門并諸大名御旗本御家人其外輕キ者百姓町人ヨ至る迄内地混亂不致御武備不衰御德ミ輝御政道難有御國恩ニ奉報候様被仰付方可有之其上外夷ミ御所置急度被仰出可然候

一水戸中納言殿御登城御役ミ儀家老嘆願ミ趣再應取調申上候所御許容ミ御沙汰無之節ハ水府國中人民嘆ミ沙汰御取調ミ通無相違事ニ相聞人氣不穩且近年外國人舶來ニ付一体ミ人氣ニ拘リ安意ミ思無之折柄故別シテ御大事ミ時節内地御整ミ儀專要ニ存候外國ミ儀是迄各方御談申候通

御法令不相立候テハ御國體ニ拘不肖ミ拙者蒙御役相勤候段奉恐入候付申上候以上

未七月

太田備中守

未八月廿七日有志御處置

切腹

水戸家老

安島帶刀

死罪

同藩

茅根伊豫之介

同

同

鶴飼吉左衛門

獄門

同

同幸吉

遠島

十月廿二夕方豊後佐伯へ預ケ

同藩

鮎澤伊大夫

同

小林民部權大夫

追放

老女

池田大學

京都へ御返し

永の儀

村岡

同廿八日幕府除目

伏見奉行

林播摩守

甲府勤番支配

新番

軍艦奉行

御臺様御用人

御役御免

同

役祿被召上

御役御免慎

御役御免

同

同

同九月十一日

太田播摩守

松下大學

加藤壹岐守

原彌十郎

土岐丹波守

岩瀬肥後守

永井玄蕃頭

川路左衛門尉

井上信濃守

淺野備前守

水野筑後守

小普請奉行次席  
駿府町奉行

鵜殿民部少輔

名 代 右股方  
平岡與衛門

思召有之候付御役御免隱居被仰付指扣可罷在旨

御先手  
十郎左衛門六男

名 代  
鵜殿適之介

鵜殿民部少輔事思召有之候付御役御免隱居被仰付候先達假養子も相願候儀ニ付養子被仰付家督無相違其方へ被下小普請入被仰付旨

精姫様御用人並

名 代  
黒川嘉兵衛

御書物奉行

名 代  
伊佐新次郎

名 代  
平山謙次郎

名 代  
島田帶刀

思召有之候付御役御免小普請入指扣被仰付旨

小十人

名 代  
平岡圓四郎

名 代  
松平大三郎

不束ミ次第有之候付御番御免小普請入指扣被仰付旨

同十二日

御目附

小栗又一

右御直ニ被仰合候

同十三日

御奥御右筆組頭格

樋口喜左衛門

御小姓組番次席

名

新見豊前守

外國奉行神奈川奉行兼帶

赤松左衛門尉

御勘定奉行外國奉行兼帶

村垣淡路守

神奈川奉行箱館奉行

小栗又一

アメリカへ本條約爲取替被指遣候間可致用意旨

道中奉行

御勘定奉行

山口丹波守

同十月七日有志御處置

右死罪

曾我權左衛門家來

飯泉喜内

松平越前守家來

橋本左内

京浪人

頼三樹三郎

大學院御門跡

六物空萬

松平伊豆守家來

八郎

大宰清衛門兄

京久助借家

宇喜田一蘆

蘆

同 松庵

蒲市正

右所拂

三條殿家來

丹羽豊前守

鷹司殿家來

三國大學

右中追放

三條殿家來  
因幡守悻  
森寺若狹守  
青蓮院宮殿家來  
伊丹藏人  
一條殿家來  
入江雅樂頭

武州葛飾郡寺島村  
百姓

山本貞一郎  
娘

とさ  
よ

右急度叱

久我殿家來  
春日讚岐守  
御倉舍人  
山科出雲守  
三條殿家來  
森寺因幡守

右長押込

有酒川殿家來

飯田左馬

鷹司殿家來

高橋兵部權大夫輔力

青蓮院宮家來

山田勘解由

三條殿家來

間田織部富力

下田奉行手付

大沼又三郎

飯泉新堂存力

右押込

一條殿家來

若松木工頭

右洛中洛外相構江戸拂

大宰清衛門

妻せい

青山風泉寺下  
當連修驗

利益庵行阿

鷹司殿家來

兼田伊織

右構おし

小網町名主ニて欠落

伊十郎

右於溜手錠

松平丹波守領分  
十兵衛忰

源衛門

信州松本町三丁目

茂左衛門

神田久衛門町二丁目  
鐵之允後見

源介

右手錠

若州派人  
八月廿三日病死

梅田源次郎

西園寺家來  
九月十三日病死

藤井但馬守

右於評定所松平伯耆守池田播磨守黒川左中立合因幡守申渡之(申渡文)

同十月廿七日

死罪

毛利大膳大夫家來

吉田寅次郎

紀州殿御領分用立町人

世古格太郎

右紀伊様御領分御構江戸拂

伊達遠江守家來

吉見長左衛門

右重追放

古賀謹一郎家來

藤森恭介

右中追放

阿部四郎五郎家來  
豐作忰

勝野森之介

薩州藩

日下部裕之進

右遠島

水府

大竹儀兵衛

藤森權左衛門家來

岩本常介

井上左京大夫家來

藤田忠藏

岡部土佐守家來

寛承三

阿部四郎五郎家來  
豐作二男

勝野保三郎



讚州藩

長谷川速水

勝野豊作妻

ちう

娘ゆふ

右押込

讚州藩

長谷川宗衛門

右長押込

元神崎寺  
坊主

知順

東大野村組頭  
甚衛門事

奥田隼人

矢幡村百姓

峯十

右無構

鈴高野村李泰事

とん

右中追放

同月廿七日除目 有志所置之  
同日之

大番頭

白須甲斐守

山田奉行

秋山安房守

御勘定外國神奈川御軍艦四奉行兼帶

西丸御留守居

水野筑後守

駿府町奉行

加藤壹岐守

御小姓組番頭

平岩石見守

同

高井兵部少輔

外國奉行

竹中圖書頭

小普請組支配

柴田能登守

同

安藤與十郎

右御直被仰合候

不時之覺

勤役中勤方不宜段達御聽急度も可被仰付候所出格之思召を以御加増之内五千石召上隠居被仰付候旨急度相慎可罷在候

名 本郷丹波守  
内藤七郎左衛門

同文言爲家督其方へ五千石被下寄合被仰付候

名 本郷石見守  
本多丹下

右昨晚脇坂中務大輔宅にて申渡

勤役中勤方不宜候段達御聽急度も可被仰付所出格之思召を以知行之内七百石餘召上隠居慎被仰付候

名 石河土佐守  
小澤新左衛門

石河豊前守

同文言爲家督其方へ貳千石被下中奥御小姓御免寄合被仰付候

名 水野采女  
名 佐々木信濃守  
今代 井左右橋

思召有之小普請入被仰付候

右昨晚安藤對馬守宅よて申渡

井伊掃部頭

御懇之上意御本丸御普請御用向重立取扱

松平和泉守

御本丸御普請惣奉行被仰付掃部頭へ申談可被相勤候

同十月廿八日

松平伊豆守家來 横山湖山  
酒井雅樂頭家來 菅野健介

問部下總守家來	大郷養藏
同	林某
松平鹿次郎家來	小南五郎衛門
松平修理大夫家來	大山三左衛門
土屋采女正家來	大久保要
久世大和守家來	舟橋亘理

右國許永押込

其外も有之よし

申二月二日牧野越中守家來呼出し安藤對馬守申渡之  
 此節 水戸殿領内長岡驛尙又多人數致出張不穩趣ニ相聞 中納言殿も  
 も深く心配被致嚴重手配致候へ共御府内他領迄罷出法外ニ所業ニ及候  
 事も難計右様ニ儀も至候ハ、於 公邊召捕引渡ニ相成候様致度旨

水戸殿ハ被仰立候付萬一他領へ罷出候節ハ召捕候筈ニ候間それハ手  
 筈致置右様ニ次第ニ至候ハ、早速人數指出召捕候様可被致候尤多人數  
 ニ無之壹兩人姿を替間道等ハ忍候て罷出候者可有之も難計候間右様ニ  
 者ハ見懸ケ次第召捕候積手配致置候様可取計候事

水戸殿家來

高橋多一郎
關鐵之介
吉成恆次郎
林忠左衛門
廣岡子之次郎
森五六郎
濱田平介

右ニ者共水戸表出奔致候趣ニ付他領等へ罷出候ハ、別して速ニ召捕

候様被仰付候

安政五年戊午七月七日御達

昨六日曉上使を以 前中納言様駒込屋敷へ御引移御慎被遊候様被仰出候條其旨可奉承知候

此度ミ御儀ニ付月番年寄衆御宅へ參上 中納言様 前中納言様御機嫌御伺可被有之候且御支配中御文庫役別以上ミ族各同様相伺候様御達ミ事

口上ミ覺

右ミ御儀ニ付 中納言様も御指扣御伺被遊候間一統敬上ミ意取失不申様よとの御沙汰ニ候條左ミ通相心得可申候

一 武藝普請殺生并郷出鳴物高聲可致遠慮事  
但無據繕普請ミ儀ハ不苦候

同十二日御達

此度ミ御儀ニ付 中納言様御指扣御伺被遊候所不及其儀當分御登 城ミ儀ハ御見合セ被遊候様被仰出候條其旨可奉承知候

同十六日御達

此度 前中納言様御慎被仰出恐入候御次第ニ有之依之御家中一統面々相慎可申萬一騒々敷儀も有之候てハ決して不相濟事ニ候条壯年ミ子弟坏血氣ミ任セ心得違出府等ミ儀有之候てハ 公邊へ被爲對候て不相濟却て 前中納言様御爲も以ミ外不宜候間壹人ふり共右様心得違ミ者無之様可被致候

八月三日御達

一三三ナニ作ル

此度 前中納言様<sup>御慎脱カ</sup>被仰出恐入候御次第ニ有之依之御家中一統面々相慎可申万一騒々敷義も有之候てハ決して不相濟事ニ候条壯年ミ子弟坏血氣ニ任セ心得違出府等ミ儀有之候てハ 公邊へ被爲對候て不相濟却て

前中納言様御爲も以ミ外不宜候間壹人より其右様心得違ミ者無之  
 様相達置候振も有之候所此度被仰出候ての從來 公邊御懷をも不奉承  
 知候故君臣ミ情義苦心ミ余如何様存詰搖動致出府候者も可有之やと深  
 く御配慮被爲在候条今井金衛門事御直ニ被仰合御指下相成候条以後ミ  
 御模様次第沙汰ミ趣を以相達候迄の子弟等ハ勿論支配々々末々迄心得  
 違無之様申合奉安 尊慮候様可被致候

同六日口達覺

此度ミ御儀ニ付面々無心元江戸表微行致度族も有之款ミ相聞候處君臣  
 ミ情尤よハ候得共此度の幾重も御國靜謐ミ不致候てハ第一 兩君様  
 よも御配慮被遊候条當主ハ勿論子弟等心得違無之様支配々々末々迄可  
 被相達候事

八月廿二日御達

此度重き 勅誼被爲蒙候趣別紙ミ通被仰出候付てハ御家中面々別して

別本少しク異  
 スアリ左ニ記  
 此度去ル二日相  
 付去ル二日相  
 候所此節ハ有之  
 遠能登者ハ得年  
 之間歎ニ相聞有  
 之候等ハ御家不  
 罷成候間ハ不  
 御口相達候事

行跡相慎 尊慮ニ觸不申様相心得可申候

口達覺

此度 公邊ミ御爲重き 勅誼被爲蒙候處御家中ミ面々別して敬慎御奉

公大切ニ可相心得旨致内達置候様との御事ニ候

右年寄衆於御部屋物頭以上一役壹人へ御達右以下御役方へ御内達

同二日御達

此御砌柄内外ミ情實をも不相辨騒敷趣も相聞候處兼て相達置候通鎮  
 靜罷在心得違無之様支配々々末々迄可被相達候事

同六日御郡奉行中

此度ミ御儀苦心ミ余郷中ミ者夥敷罷出候由ミ所奉對 公邊恐入候事故  
 爰許鎮撫ミ上若年寄壹人兩番頭三人御目附奥御右筆共一同即刻出府爲  
 致實地ミ事情をも得ト申上御連枝方立入等ミ儀屹ト御指留ニ相成候様  
 申立候間郷中ミ者へも右ミ段得ト申合候様可被取扱事

同六日御達一本七日ニ作ル

此度ミ御儀ニ付江戸表御模様苦心ミ余兩御屋敷御手薄ミ儀奉恐察追々無願出府ミ族も有之趣も相聞候所 御家ミ安危も相拘リ候御砌故臣下ミ人情尤ミ候得共御中陰中動搖致候テハ奉對 公邊恐入候間幾重も相慎可罷在右ニ付太田誠左衛門并中山與三左衛門早刻致出府御家中一統存詰罷在候情狀具ニ申上候条面々屹度鎮靜相慎罷在候様可被相達事

口達ミ覺九月四日ニ

御砌柄鎮靜ミ儀追々相達置候所 兩君様も悉く御配慮被遊此度御用人兩人御目附兩人鎮撫ミ爲御指下ニ相成候条尙更靜謐ニ罷在候様支配々々へも可被相達事

十日ハ御國ニ  
て拜見候日ニ

九月十日 今公御直筆ミ寫

此度ミ儀ニ付テハ國許杯マテハ如何様ミ風聞致候ヤハ難計候得共此上

前様并我等杯ミ身ミ上ニ拘リ候事ハ一切無之右ミ儀ハ耽ト見込も有之候事故此節動搖致候テハ却テ不宜右ミ趣一同へも早々相達安心致候様可致事

九月七日 水戸家老初一同ハ

同七日 今公御直筆ミ寫

讚岐守立入ミ儀ハ見合セニ相成候間右ニ付誠左衛門相下候間同人へ委細承候様可致候事

九月二日

織部  
藏人ハ

德案ルヨ此御書九月二日ニ御下ケミ筈カシ眼前讚州御斷ハ小金へハ十八日御書御下ケニ二日ハ讚州盛事ヲ計リし時ニ太田誠左衛門ハ九月七日南上ミ振御達ニカリス人ハ月日ノ誤リ明白カ  
リ可考

秘笈雜錄

明七日御達

此御砌動搖致間敷旨度々相達候振りも有之候所兎角不穩面々 兩君様御機嫌相伺度存詰候余追々無願出府之族も有之歎ニ相聞候所臣下之義彼是御案し申上候儀尤ニ候得共 公邊御中陰中騒々敷相聞候てハ以の外不宜却て上ミ御爲も不相成旁恐入候次第ニ付何分も相慎可罷在候右ニ付昨日相達置候通太田誠左衛門等早速罷登申上候振りも有之尙又寛河内守并兩御番頭之内にて罷登御連枝様方へ申立候意味も有之旁以騒々敷様にてハ罷登言上致候妨も相成候間右ミ趣父兄ハ勿論親類共も心を付無願出府等不致候様子弟等へ屹度申含鎮靜罷在候様支配々々末々迄可被相達事

口達ミ覺

頭申聞も不相用無願にて出府致候者此方にて構不申候事

同十八日御達

是ハ九月七日  
拜見之

讃岐守様大學頭様播戶守様御取締向御立入御相談被成候所御指支ミ儀も被爲在候ニ付御相談ミ儀御斷被遊候旨太田備後守殿内藤紀伊守殿御招御内談被遊候所無御余儀筋ニ付其段相心得取扱候様支配々々へも可被相達事

讃岐守立入ミ儀ハ見合セニ相成候付誠左衛門指下候間委細右同人ハ承候様可致事

織部藏人ハ

同十八日 今公ハ御直筆を以小金驛出發之者へ御下ミ寫

此度連枝方家政向へ立入ミ儀我等面目ヨ拘り候儀厚く存入沙汰止ニ致度存意を申立候趣至誠ミ至不堪感喜候尙又 前様御慎解ミ儀苦心致候趣於我等も孝道ミ儀幾重も 公邊ニ申立候心得ニ候間一同相舍居候様尙又當地ニ長く逗留致候てハ 前様我等爲ニ相成不申事故早々引取候様致度此段申聞候事

同日 駒込様を三輪友衛門を以 御意に趣

此度各罷登候儀精忠に段屹度承届候畢竟それ故連枝方離れよも相成候  
忠義實に致感心候此上之模様相伺候と申義も至極尤に候得共長く逗  
留致候てい 中納言爲よも如何と存候間是を機會よ引取候様御意に事

同日文武師範御床机廻之面々へ御達

此度罷登候族一統引拂罷下候様相達候所各儀の追て相達候儀有之候  
条其旨相心得當宿に罷在候様可被致候事

十九日白井太田兩執政小金へ來り引拂方被仰合候上翌廿日晝時

磯邸へ引取に相成候事

同十三日 今公輕部平之允新井源八郎へ御意に覺

此度國許の大勢罷登り小金よも夥敷聚居屋敷内へも余程聚り追々上書  
等も有之一統に存意に品も委細相分居候所一体連枝立入に儀深く苦心  
に趣尤に相聞候間一旦 公邊に御趣意も相立連枝共爲立入候所右様大

勢出府に相成候てい此先如何様之儀に可及や甚に心配致候間右に廉を  
以連枝立入候儀の幾重よも閣老へ斷候存意に候間屋敷内は居候者何レ  
も此先の靜謐に致白井井杯へ大勢罷出論判致且壹人よても過激に者有之  
候てい此後之扱指支候間靜り居候て模様を見候様可致其内よの模様よ  
て相分可申候間心得違無之様兩人にて精々申諭候様可致この趣

十一月廿八日御達

來ル朔日 將軍宣下御規式有之候事右に趣奉承知支配々々へも可被相達事

十二月五日御達

上様御事 將軍宣下御當日の 公方様と奉稱候事

杉浦執政の口達に覺

此度 將軍宣下被爲濟候所 前中納言様御慎不被爲解御登城不被爲在  
候付苦心に余壯年之族搖動無願出府いし候様よてい 禁廷 公邊  
へ被爲對候て不相濟 兩君様殊に外御配慮被爲在尙又御不爲に相成候



様よての旁不相濟候間心得違ミ族無之様頭よて精々申諭候様若又存寄  
等も有之族の書附よて其筋へ指出候様旁口達ミ事

同八日御達

此節御慎解等ミ儀諸向嘆願ミ義も有之人臣ミ人情尤ミ儀ニ付年寄衆よ  
て御引受出府被致候付爰許幾重よも鎮靜致居候様尤 勅諭被爲蒙候御  
家ミ儀ニ候得の 天使在江戸中の別して相慎可罷在候萬一動搖致居  
候ての 天朝へ被爲對不相濟事ニ付至極御配慮被遊候條此段厚く相  
心得靜謐ニ罷在候様可被相達候事

同十五日御達

此度ミ御儀ニ付御家中一統嘆願ミ趣年寄衆并我々立場よて引受罷登候  
段相達置候所自然動搖ミ姿ニ相聞 前中納言様御慎解御嘆願ミ廉々御  
指障よも可相成やと深く御配慮被遊相扣候様ニとの御下知ミ御旨も被  
爲在候所萬一動搖ケ間敷相聞御慎解の勿論御登城御指障よも相成候て

の却て恐入候事ニ候兼て一同苦心ミ段の尤ミ事ニ候条無程罷登候事ニ  
候条得ト相心得粗忽ミ儀無之様屹ト可被相心得事

安政六年己未正月十七日御達

前中納言様御慎解并 中納言様御登城ミ儀御國中一同志願ミ趣我々共  
引請御連枝様方の不及申御老中方へも厚く申上候所元日御登城ミ儀不  
被仰出誰迎も心痛無此上候然る所一同心底ミ所之於 公邊も深御察被  
爲在候間鎮靜致居候の、無程御吉兆も可有之動搖ケ間敷相成候ての御  
首尾合よも拘候趣御響きも有之大切ミ御場合此上何分心力を盡候の勿  
論御連枝様方よも厚御周旋被爲在候間 兩公御爲を存候の、幾重よも  
鎮靜致居御沙汰相待候様厚可被相心懸事

同日鈴木石州の口達

御國動搖ミ儀の 兩君様追々深く御配慮被遊尙我々へ 御筆御下ケニ  
て此上無願出府ミ者有之候ての却て 前中納言様御爲筋よも不相成御

儀ニ付精々鎮靜罷在候様一同申合取計候様ニとの御事ニ候間右ニ段厚致承知何分も鎮靜罷在候様支配々々末々迄屹ト可被相達候事

同三月十九日御沙汰ニ大意執政衆御部屋ニ於て達

此度間部下總守歸府致候所是迄公邊御模様等浮説流言承及候付苦心ニ余内々出府致居候類不少欵入御聽殊ミ外御配慮被遊是迄追々御下知被爲在候儀ハ各承知ニ通ニ候得共先達御下ケニ相成候、救書ニ儀ニ付浮説流言を信し彼是心配致し動搖ニ均敷始末柄も有之やミ趣入御聽候所救書ニ不容易段ハ御込々へ被爲在候間右様ニ事ニ心配不致面々々武備心懸居只今も天朝公邊ニ御爲非常ニ御用向被仰出候節不覺無之様可致尙更萬々一前中納言様御始御身ニ上ニ拘り候程ニ儀有之候ハ迅速ニ相運ひそれ御下知被爲在候間夫迄ニ所ハ幾重も鎮靜罷在候様支配ハ勿論子弟等ニ至る迄得ト申諭置候様よとの趣肥田其太郎久木直次郎へ御沙汰被爲在候條

各立場ニて別して厚く相心得夫々指揮相届候様可被致候事

四月廿七日 今公御直書ニ寫

薄暑ニ節愈無事ニ候や承度候然レハ鎮撫ニ儀ニ就てハ追々申聞近頃鎮靜ニ趣相聞候付致安心候所此度帶刀等公邊御呼出しニ就てハ不容易流言等も難計候得共萬一搖動ケ間敷儀有之候てハ家ニ安危も相拘り甚致心配候間家老共も深く心配いふし今廿七日與三左衛門儀讃岐守へ罷越公邊御模様等厚く相尋候所追々内話も有之通國中悉く鎮靜罷在候得ハ前様我等身命ニ儀ハ何等次第無之趣別番ニ通讃岐守申聞候旨家老共ハ指出し候間右ニ趣一同致安心鎮撫方厚く相心得取計可申事

四月廿七日

水戸家老初へ

去ル廿七日與三左衛門讃岐守様へ罷出奉伺候御意ニ趣御前まで認指上候書付ニ寫

此度帶刀等御呼出しニ付御國中ニ族彼是不容易流言等も有之候へとも一統鎮靜罷在候得ハ御兩君様御身之上ニ御次第も無之ニ付萬一搖動ケ間敷儀も有之候様ニテハ御家ニ御安危も相拘り候程も難計御場合ニ付立場柄相心得可申候事

徳云此時ハ讚州頻リニ事を用る折ニテ其已前白井執政一旦失策シ讚州を以て御愼解嘆願セハ事も可成と見込それハ讚州へミ通路公然と開け其比時勢を觀望しける久木直次郎等一向讚州へ取入自然右様ニ醜態を顯すニ至る可嘆ニ至リハ右ニ御書御國へ被下シメ政府ニ日定小田部等ニ如キ者迄も此御書を出シカハ關國ニ義氣一時ニ勃興シ大變を生シ可申といヒ有志ミ士ハ眼前君を御不明御不義ニ地ニ奉落入姿カレハとしや御筆ありとても表發セさる方可然是さへ出候様ニテハ決して臣子ニ職分不相立と争ヒシウ愈可出メ決して五月三日ニ至拜見被仰付シハ案ニ不違

關國一層ニ憤激を増シ暫時ニ大發トカリシハ我ハ其已前南發セシウハ御筆をハ不拜見併當時ニ様邸中ハ悉ク奸世界トカリ忠臣義士最早百方策も盡キ淺間敷事ナリキ後ニ公被仰シハ四月廿七日與三左衛門讚州カハカハ事共を聞テ歸レリトテ與三を深く咎ルヨシカレトモ是ハ全く與三ニ冤罪ト云ヘシ其以前ハ直次郎讚州へ度々參リ内輪ニ事皆直次郎拵ヘ置シ所へ折惡ク與三參リハる故右をも承リハるニテ直次郎こそ實ニ遁れ引キカハハ所ニト被遊シトそ

五月  
同八日御達

此節在方等ニ者追々江戸表へ罷登候由相聞候所御支配中井ノ子弟等右様ニ儀有之候テハ不相濟儀ニ付鎮靜罷在候様ニト年寄衆被仰聞候事  
同九日口達ニ覺

年寄衆太田誠左衛門殿御宅へ羽太半衛門殿御呼出しメ被仰聞候ハ無

願出府之儀無之様相達置候所心得違之者も有之趣相聞候間申合屹ト相達候様よと御口達候事

同廿日 老公御筆之寫

我等慎以來國許士民等之模様更ニ耳よも不入候所其許登城我等慎解之儀今ヨ御沙汰無之此上一家之浮沈よも相拘候やと追々致過慮苦心之余此度數千人罷登候趣承り深く致心配候臣下之至情主君之開明を祈候段至極之儀ニ有之精神之至感入候得共右之爲ヨ國中動搖致候様よてハ我等積年の素志ニ背候のみあふす第一 威義兩公以來敬上之誠意ニ不當自然其許初役人中迄不行届之筋ニ陥り候てハ國家之不爲申迄も無之慎中別して深く致痛心候我等慎之儀側向初承知之通禮服正坐罷在候儀偏ニ敬上之一念ニ有之候所臣下之身ニ取右之深情をも不相察動搖ケ間敷有之候てハ不相成候間厚く加思慮罷登候者共一刻も早く爲引取候様役人共一致いふし可取締旨屹度可相達者也

本文之儀我等が指圖致候事ニも無之候得共此度之事柄品ヨ寄安危ヨも相拘り可申と深く心配いふし候余申進候吳々も厚く下知爲致候様よと存候

五月

景山

中納言殿

參

今公御筆之寫

前中納言様ハ御別紙之通御親書被遣候所御苦心之余ケ様御懇切ニ御書被遊候儀誠ヨ以恐入候次第一同之精神ハ御書之通感し入候儀ヨハ候得共右之一條を以て國の安危ヨ拘り候程ヨ相成候てハ 祖宗へ對不相濟次第申迄ハ無之 前中納言様ニハ御老年ヨ被爲在此度御心配よて御寢食をも不被安候儀誠ヨ以恐入候次第故右之所一同奉推察早速ニ引取候様可致事

五月廿日

秘笈雜錄

德案るよ此御書の余小梅ミ邸ニ在し時ニ事ニ既ニ拜見被仰付計ニありて俄ニ御模様替り夫切ニあり其後協合ハ内々ニて拜見セシト覺ゆ

同日 老公御筆ニ寫

此度士林ニ族大勢罷登候付郷中ニ者も追々引續候趣承候所 中納言登城も無之 我等慎も不解罷在候段悲嘆ニ堪兼爰許事情も不相弁指迫り候情合より出發ニ及候儀尤ニ筋ニ相聞候得共兼々承知ニ通我等慎深く罷在候も全く敬上ニ意ニ候得ハ下々儀右ニ誠意を取失候様成行候てハ我等ニ所存トハ相違故其方共ニ於ても厚く勘弁可致筋ニ有之候所此上鎮撫方不行届候てハ 我等中納言身ニ取候てハ 公邊へ對し不相濟様成行深く致心配候殊ニ時節柄農事打捨長々罷在候得ハ詰り當年收納ニも相拘可申候間旁一刻も早爲引取候様幾重ニも手段相盡可申尙委細ニ儀ハ中納言迄申聞候間是ハ可相違事ニ候

郡官共ハ

今公御筆ニ寫

追々申聞置候所 前中納言様ハも別紙ニ通被遣候間一同早々引取候様取計可申事

五月廿日

郡奉行共ハ

六月十五日 今公御書ニ寫

此節追々國元ハ嘆願等ニ爲出府ニ者有之所其地ニ殘候者も一統鎮靜居致候故國許守衛ニ儀ハ我等苦心至候事も無之畢竟各行届候故ニ儀感し入候然る所五ヶ國條約被仰出候ニ就てハ又々國元動搖無心元存候此上國元ニてハ幾重ニも鎮靜いハし候儀此節ニ奉公ト存候右ニ意味相諭精々鎮撫可致事

八月三日 今公御筆ニ寫

前中納言様御慎解我等登營ニ儀爲歎願出府致候所最早百日近くニも相

成大勢よて永々在留致居候様よての對 公邊不相濟儀ニ候得の一同得  
ト了簡致し歸國之上相待候方却て嘆願之儀も通可申尙又永々在留致居  
候様よての第一金穀も續き不申萬一之節 公邊ニ御用よも相立不申様  
よての何共恐入候次第ニ付役義有之面々の勿論罷下り國許大切ニ相守  
沙汰次第後レを取不申候様心掛武器手當行届候様致度事ニ候

八月三日

小梅詰へ

書添萬一火急ニ引取兼候者有之候の、其筋へ申立候様可致事

同日小梅詰へ

此度松平和泉守殿を左ニ通御書附相渡候付ての 公邊御沙汰ニ趣厚相  
心得罷下り何分よも鎮靜致居御沙汰相待候様御下知ニ付此段相達候條  
兩君様尊慮奉安候様可被心掛事

興津藏人の

書面御申聞之趣ニての八幡町邊御引拂之由ニ候得共取鎮方行届候儀と

も不相聞候此邊所々出張罷在候者も不少右様よての追々申達候通 水  
戸殿御爲よも不宜候事ニ付家老衆一同厚く勘辨思慮被致御家中向の勿  
論御領分末々之者共心得違無之様教諭可被致候尙又、之家へ歎願被致  
候由右様多人數出府致候儀有之候ての以之外不宜此後右様ニ儀無之様  
取締可被申付事

九月二日 今公御筆ニ寫

此度安藤對馬守事 公邊へ拘候用向よて當分ニ内呼出候儀も可有之所  
右ニ付ての我等心中變り候儀の無之故安堵致候様扱 前様御下向ニ付  
公邊へ對突當有之様ニての御配慮懸申上候様よての恐入候故右ニ  
所を厚く相心得致安堵候様一同へも内々相達候様可致事

九月二日

孫次郎  
多一郎

十月二日御達

中納言様御指扣不被爲及其儀昨朔日御登城被遊候様一昨晦日被仰出候  
條其旨可奉承知候

右之趣支配々々末々迄可被相達事

八月廿七日御達は江戶表之

今日 上使を以て 前中納言様御國御塾 居中納言様御指扣被仰出候  
條其旨可奉承知候

口上申添

別紙被仰出候趣於我々ても奉恐入候仍て此砌柄一同も物毎相慎可申  
候支配々々へも相達候様

九月二日御達

本月廿七日 中納言様御指扣被仰出 前中納言様より御國御慎被仰出  
候付昨朔日曉駒込御發駕明三日御發駕被遊候所此度之儀ハ萬端差略可  
致との 御同所様尊慮被爲在候条其旨厚く相心得御著奉待候様可致候

尙更右之趣支配々々末々迄可被相達事

朔日御發駕小金御泊り藤代御泊府中御泊四日夕御著城ニ相成候

同三日御達

前中納言様去ル朔日卯之上刻駒込御發駕今三日府中御泊明四日御著城  
被遊候条其旨相心得支配々々へも可被相達事

德云八月廿七日以後ハ九月二日御筆之前ニあるへし

秘笈雜錄

三

秘笈雜錄

二百八十八



晚綠齋秘笈

目次

鹿兒島侯直筆

呈脇坂侯書

鬼退治存意書

別紙存意書

長岡情實

大場老大夫呈 老公書

秘笈雜錄

二百八十九

薩州侯直筆之寫

方今世上一統動搖不容易時節ニ候萬一時變到來ニ節ハ第一順聖院様御深  
意を貫き以國家奉守護 天朝可抽忠勤心得ニ候各有志ニ面々厚く相心得  
國家ニ柱石ニ相立我等ニ不肖を補不汚國名誠忠を盡し吳候様偏ニ頼度候  
依て如件

安政六年己未十一月五日

源 茂 久

花押

誠忠士ニ

面々中ニ

脇坂侯へ呈せし書

謹而脇坂侯執事ニ奉上言候執事御儀御賢明ニ被爲在天下ニ政道無邪御取  
計被遊候儀と奉存候間草莽ニ我々共申上候ハ恐入候得共存詰候儀無伏臆  
別紙ニ相認奉瀆高覽候追々御大老并伊掃部頭殿所業を洞察仕候所權威を

秘笈雜錄

二百九十一

恣に致し我意に不叶忠誠厚き人々を以て御親藩を始公卿衆大名旗本に不限讒誣致候て退隱幽閉等被仰出候様取計就中外虜に儀に付ては虚喝に猛勢に恐怖致 神州に大害を醸し候不容易事共指許御國体を穢し乍恐 叙慮を奉惱 勅意にも奉違背候のみおす 御讓位に儀を企候段奸曲に至天下の大罪人と可申奉存候右罪狀に儀に委細別紙に認候故御熟覽御賢慮に程奉祈候扱右様を奸賊御坐候ては此上將軍家御政道を辭し夷狄に爲に被制禍害をおし候儀眼前に有之實に天下に御安危に拘り候儀と奉存候故此度天誅に替り候心得に斬戮仕候事御坐候毛頭 公邊へ御敵對申上候儀に無之且全く我々共忠憤に余天下に爲と存詰候ての事御坐候間嚴刑に御處置被遊候共御恨み不申上候依ては元主人家譴責を蒙候様儀に無之様奉願候將又此上の天下に御政事正道に御復し忠邪御弁別被遊殊更夷狄に御取扱に至候ては祖宗に御明訓御斟酌被爲在華夷内外に弁得と御勘考被遊御國威を損し不申様御判談に程奉渴望候此段罪萬死を不願奉

申上候恐惶頓首

御暇願左之通

私儀代々御高恩を蒙り罷在候身分にて奉願候に恐入候得共此度天下國家に爲存詰候大願有之出府仕候間何卒御暇被下置候様仕度奉存候此段相濟候様宜敷被仰立可被下奉願候以上

鬼退治存意書各懷中之寫

墨夷浦賀入港以來 征夷府に御所置假令時勢に變革も有之隨て御制度も變革おくては難相成時情有之候との乍申當路の有司専ら右を口實として一時儉安畏戦に情より彼ら虚喝に勢焰に恐怖致貿易和親登城拜禮をも指許し條約を取替し踏繪を廢し邪教寺を建にニストルを永住爲致候事等實に 神州古來に武威を穢し國体を辱め 祖宗に明訓緒謀に戻り候のみおす第一 勅許も無之儀を被指許候段奉蔑如 天朝候儀に有之重々不相濟事候追々大老井伊掃部頭所業を致洞察候よ 將軍家御幼少に御砌に

乘し自己ミ權威を振とん爲公論正議を忌憚り候て 天朝公邊ミ御爲筋を深く存込候御方々御親藩を始公卿衆大小名御旗本ニ不限讒誣致或ハ退隱或ハ禁錮等被仰付候様取計候儀夷狄跋扈不容易砌と申内憂外患追日指迫候時勢ニ付恐多くも不一方被惱 宸襟御國內治平 公武御合体彌長久ミ基を被爲立外夷ミ侮を不受様被遊度との 叡慮ニ被爲在 公邊ミ御爲勅書御下ケ被遊候欵ニ奉伺候所違背仕尙更諸大夫始有志ミ人を召捕無實を羅織し嚴重ミ所置被致甚敷ニ至候てハ三公御落飾御愼 粟田口親王をも奉幽閉勿体なくも 天子御讓位ミ事迄奉釀候件々奸曲莫所不至矣豈天下ミ巨賊ニあらずや右罪科ミ儀ハ委細別紙ニ相認候通ニ候斯る暴横ミ國賊其儘指置候もまほしく 公邊ミ御政体を亂り夷狄ミ大害を來し候儀眼前ニて實ニ天下ミ安危存亡ニ拘り候事故痛憤難默止 京師へも及奏聞今般天誅ニ代り候心得よて令斬戮候申迄ハ無之 公邊へ御敵對申上候儀ハ毛頭無之何卒此上 聖明ミ 勅意ニ基き 公邊ミ御政事正道ニ御復し

尊 王攘夷正誼歸道天下萬民をして富嶽ミ安ニ處セしめ給也ん事を希ふのみ聊殉國報恩ミ微衷を表し伏て天地鬼神ミ鑒照を奉仰候あり

別紙存意書

皇國千萬世 天日嗣連綿照臨し給ひく伊勢ミ 神宮も上古ニ替ふセ給也す神道を尊ひ武力を尙ひ給ふ事自然ミ遺風餘烈おれの古より遠略をのべ給ひ且夷狄ミ禍有之候得ハ精々退攘し給ひし事青史ニ著して今更奉稱揚ニ不及武將ミ世とありても弘安ミ蒙古を塵よし文祿ミ朝鮮を征する事共 神州ミ武威を海外ニ輝候儀人口ハ膾炙する所おれの是又贅言を不待 東照宮ニ至給ひてハ尊 王攘夷ミ御志深く被爲在候ハ不及申上但勃興ミ御盛時おれの其初ハ諸蠻來航通商等も許し置れ玉ひしうとも諸蠻も畏服して覬覦ミ念を達する事おらず然る所 東照宮終ニ其鉅害ある事を洞見し給ひて洋教ミ禁を嚴よし給ふ大猷公ニ至り益邪徒を驅斥斬戮し三眼の明を四海ニ布き給ふ事誠ニ千古ミ英見卓識よて後嗣遵奉し給ふ所ハ扱

近時に至りてハ夷狄狡謀黠略者多く出て萬國へ通信貿易し遂ニ小を併  
セ弱を制し次第ニ境界廣大ニ相成候勢ニ乘し屢 神州をも覬覦せらるゝ至  
る乍去打拂ミ令有之時ハ格別ニ事ハ仕出す事も成得ずして打過ぬ天保十  
三年打拂ミ令を停め仁恤セラレしより頻リニ來航し跋扈ミ態を顯すゝ至  
る就中嘉永癸丑墨夷浦賀へ入港威暴を示し難題申掛候以來ハ征夷府ミ御  
處置方古今時勢ミ變革も有之一概ニ御國威御主張難被遊儀ハ治世ミ風習  
左も可有之事ニ候得共申迄も無之夷狄貪憚元より壓事さく殊ニ狡謀譎計  
を挟み覬覦ミ念を逞く致候故詰り邪蘇ミ術中ニ落入り 神州ミ泰否も  
拘り候重大ミ事ニ候得共華夷ミ弁和謀始終著眼ミ大基本 御廟議御一定  
ミ上諸制度御變革無之候てハ時勢ニ於て不相叶筈ニ候得共近來諸蠻夷ミ  
御扱振推察仕候てハ乍憚一定ミ御廟算如何可有之哉去ル卯年迄ハ追々内  
備嚴整ミ御達有之邊海ミ御守衛被仰付候大名ニ至てハ多年防禦ミ爲國力  
を費し被勵忠勤候處不圖も去ル辰年和親交易御取結ミ上恐多くも征夷將

(日本通志)  
巳年ハ午年ノ  
誤カ

軍ミ御居城へ夷狄共登 城被仰付剩御饗應尊敬を被盡候有様春秋城下ミ  
盟を恥る比較ニ隔るす 神州古來未曾有ミ御失体にて實ニ冠履倒置ミ御  
處置と可申候也驚嘆ミ至りて假令御國政ミ儀關東ニ御任セヨ相成居候と  
て斯る重大ミ事件第一 勅許不被爲在候儀を全く掛りミ有司數輩ミ了簡  
を以て五ヶ國へ本條約指許し 將軍家御印章ミ御書翰迄被指遣候始末何  
程儉安ミ末俗戰爭ニ及候を恐怖致候として天下後世へ對大義名分と申も有  
之武門ミ列ニはるかり二百年ミ恩澤ニ浴し居候てハ悲泣ミ至りニ不堪況  
や 徳川家譜代恩顧ミ士 東照宮ミ神靈ニ奉對沈黙傍觀致候儀廉恥無之  
と可申決して不相濟事也扱陳せる迄も無之天下ニ所聞見ニ候得共前件夷  
狄交易ミ儀如何様も 勅許申請度所存にて去ル巳年春堀田備中守上京  
致賄賂金錢を以て關白殿下を誑惑致勿体さくも 龍顏を可奉暗と陰謀秘  
計不一方候所 今上帝聰明絶倫千載不出世ミ 聖主ニ被爲渡 皇國開闢  
以來尊嚴ミ國体醇厚ミ風俗 今上ミ御代ニ及ひ夷狄ミ爲ニ消却汚穢被致

候ての第一伊勢神宮御始メ 御代々々々御神靈ニ被爲對 王位ニ御任不  
被爲濟尤戰を被爲好候よの無之 國体を不失萬民安堵ニ被遊度との 叡  
慮より賢くも一七日之間供御御絶被遊石清水等へ御祈誓被爲籠關東より  
如何様被申立候とも一切御許容難被遊萬一非常之節の縦令萬里ニ波濤を  
越へ孤島ニ終り候共御憾不被遊爲在候得共泉涌寺を御離被遊候事難被爲  
忍と窃よ 宸襟を御濕し被遊候御事傳承仕四海ニ人民誰う感激悲泣セさ  
らんや當此時 神州ニ命脉累卵より危き事ありしう百官群臣忠憤切迫ミ  
余八十八人ニ堂上方 禁中へ馳參り萬死ミ力を以諫争を奉り其外有志ミ  
大小名勤 王ミ凝忠を獻セし故 三公御始メ彌增感憤被遊安政乙卯被緩  
叡慮を三港ニ外近畿及ひ數ヶ所ニ開港并夷狄永住邪教寺取建等ミ儀の  
一圓御許容難被遊趣以 勅命御下知被爲在尙又内地人心ミ居り合如何ニ  
付大小名ニ赤心も被知食度尤衆議奏聞之上 叡慮難被決候の、伊勢大神  
宮神慮可奉伺との御儀三月廿八日議奏傳奏衆より堀田備中守へ御返答書

被指下俄ニ下向被仰出候儀ミ所夷狄よ内條約ミ儀既ニ被指許候事故諸大  
名ニ赤心有体ニ達 叡聞候様よの不相成依て表向天下へ意見建白ミ達の  
有之候得共蔭より某等を以て専ら西洋ミ事能を強大ニ主張し交易御指許  
の一時ミ權宜無御據萬一關東ミ御旨意ニ違候ての家ミ爲ニ不相成と吉凶  
禍福を以遊説いし尙又 御三家方への御建議ミ文意認直し候様御内諭  
も有之由ニ候得共 水戸前中納言殿への關東輔弼ミ名將ニ有之尊 王攘  
夷ミ御論始終一致ミ御方故御廟算伺書といふ書壹冊當今ミ急務より將來  
ミ大害よて丁寧誠實ニ建白被致 尾張中納言殿も御内諭ニ不泥 京師  
ミ御旨意よ本つき御處置無之候ての不相濟と被申立候よし實ニ難有事と  
謂はべし其後彌 勅許ミ有無ニ不拘 關東ミ御決行を以假條約御指許し  
ニ相成候趣ニ付御三家よての尾張殿水戸殿御三卿への田安殿一橋殿御家  
門への越前殿忠誠無二ミ御方御一同登 城ニ相成 將軍家御對 顔被願  
候所御所勞よて御逢無之依て元老井伊掃部頭初メ御呼出し 天子ミ

勅命御遵奉無之假條約御指許ニ相成候てハ 將軍家御違 勅ミ罪御遁被遊間敷。東照宮以來 御代々様へ御對被遊候ても如何可有之や各方ミ了簡も伺度旨御一同御演述ニ相成候所御目前よてハ掃部頭始奉畏服候由候へ共執頭ミ威權を以不日ニ條約指許し恐多くも 將軍家を御不忠御不孝ニ奉陷 德川氏ミ御稱號を千百歳ミ後迄奉穢候のみかす 將軍家御大病人事をも御弁へ無之砌ニ乘し無實ミ罪を羅織し御親戚ミ御方々を奉禁錮其他正議ミ大名松平土佐守始兩三人御威光を以無体ニ隱居爲致候所業惡ひよも余りありと可申且又 御幼君ミ御時節を幸とし御三家方ミ權勢を挫らん爲御連枝又ハ家老よて本家主家をも押領掌握せんと奸曲ミ巧みある松平讃岐守水野土佐守竹腰兵部少輔等徒黨ニ引入れ種々奸計を運し且我意ニ隨ひ不申正議ミ士をハ貶斥いさし 東照宮以來ミ美意良法近日破壊ニ及候事長大息ミ至りニ候其後八月ニ至り 叔憤ミ余三家大老ミ内上京致候様重き 勅書御下ケニ罷成候所御請も指支 尾水兩家ミ儀

ハ不束ミ儀有之慎申付掃部頭儀ハ御用多よて上京難相成且先輩堀田備中守等取扱候儀今更致方も無之依て嚴重申付候旨議奏衆迄申立己ハ逆罪を遁れ可申と相工み間部下總守上京爲致專々恩威を以押付候所存よて賄賂を用ひ九條殿下を徒黨ニ引入レ内藤豊後守へ命し 御所向取締彌嚴重ニ致し恐多くも 天子御讓位をも被遊候様奉要候得共 三卿方御賢明ミ御方ニ多しハ奉輔佐 叔慮ニ付 朝威確乎として御撓み不被遊依之無實ミ御罪申觸し鷹司殿近衛殿三條殿等御落飾御慎被遊候様取計其他諸大夫始メ何一ツ罪科無之者を召捕關東へ指下しそれハ非道ミ處置致し專々虎狼ミ猛威を以て天下を屏息せしめ畿内ミ開港并邪教寺取建等本條約指許し且ハ 青蓮院宮様御英邁を奉忌御失德有之様申觸し御寺務取放奉幽閉候所業乍恐 玉體よも可奉迫ミ機顯然よて北條足利ミ暴横ニ均しく共ニ天を戴りさる國賊といふへし嗚呼此儘ニ打過かハ赫々さる 神州一兩年を不出内地ミ奸民邪教ニ靡き彼り勢焰を助け 皇國ミ奸賊平身低頭

して彼ら正朔を奉むる事掌の上と視るゝ如し苟も人心有之者實ニ痛心長大息不堪事亦々或や雖然 東照宮ニ御德澤未タ地ニ不墜御三家御一門の尾張殿水戸殿一橋殿越前殿阿波家因州家ニ如き 徳川家輔佐ニ良將も有之外諸侯も薩州仙臺福岡佐賀長州土佐宇和島柳川等天下ニ爲忠憤ニ念日夜怠らざる有名ニ諸侯も不少候へ内ニ則ち御家門方 將軍家を奉輔佐専ら内政を修め外ニ則ち有名ニ諸侯一意忠力を盡し武備を整へか神州ニ恥辱を一洗して 叡慮を奉安候事天地ニ誓て疑はるまじ依之當今ニ事態ニ概略を記して天下ニ公論折衷を待ち左祖して天下を興起せんと欲するあり周の衰る婦人をも不恤緯して周家ニ亡るを憂ひしよはして三千年余ニ 天恩を戴き二百年來 東照宮ニ恩澤ニ沐浴する者誰レ報效ニ念あらずんや草莽ニ小臣痛憤切齒ニ余寢食を不安日夜遺憾を吞く時勢を憂ひしう彼ら罪惡追日増長豈唯 徳川家ニ罪人のみあらず實ニ神州ニ逆賊ニ天地神人同憤ニ時ニ乘り天下諸藩ニ同志と合力同心して天下奸賊

を誅伐し神罪を蒙らす者也

## 長岡情實

去十二月中長岡へ罷出居候諸生ニ族追々不法ニ儀有之其儘被指置候て御政体へ相響き以の外不相濟御事ニ付此度御人數御指向ケ御召捕ニ可相成と夫々御手配ニ罷成候段無餘儀御事情より御坐候へ共元來叛逆を謀候爲罷出居候儀より無之臣子ニ身存詰候筋有之次第ニ指迫候情合より種々不法ニ儀も仕出候事にて右不法ニ事のみ御察當ニ相成候て恐入奉存候より外無御坐候へ共此度ニ如く叛人同様ニ御扱にてハ乍恐承伏仕間敷尤此度とても初發より直様御召捕と申儀ニ無之一應ニ御諭被爲在其上承伏不致ニ於てハ臨機應變ニ御處置と申御仕組にて 御親書御下ケ被遊執政衆持參ニ罷成候趣御坐候所何程頑狂ニ者共ニ御坐候とも 御親書を以御諭ニ罷成候儀を一圓違背可仕筋より無之萬一違背仕不相濟所業も御坐候上りともはれ最初より必定違背可仕と御見切ニ上戰士同心



迄武器用意被遣候儀の如何に御懷に可被爲在候や右よての全く諸生を激  
させ候迄に御手段よていつく迄も心服爲仕候御仕向ケに無之様愚慮仕  
候何を申上候も面々よての爲國家御奉公可仕と存詰罷在候儀に御坐候へ  
の少年血氣ミ族元より見込違ミ品も可有御坐候得共御理解ミ筋決して不  
相用と申儀の毛頭有之間敷是迄執政衆登り下りミ節又の御役々罷越被相  
諭候儀不一度御坐候へ共諸生存意ミ筋申立候得の何レも尤と聞取候旨挨  
拶有之候欵に相聞正月中參政衆始メ御目付五人其外罷越相諭候節も議論  
に指詰り御用と稱し夜逃同然罷歸其後に至り候ても一同心得違ミ旨被相  
諭候儀の曾て承り不申左まれの諸生ミ身に取候ての面々理合ミ事のみ申  
居候心得よて罷在候半既ニ二月初執政衆兩人罷登候節も同所よ於て一同  
ミ存意承り届候所尤ミ儀に付著府ミ上志願ミ筋致言上尙品に寄挨拶可致  
との申聞よて罷登候様よも承知仕候得の諸生ミ族右挨拶を相待居候事ニ  
可有之候所不圖も十八日ミ御處置に及び一同何程欵驚入候半元より剛腸

ミ人々よて尋常ミ御諭よての承伏不仕段指見居候得共前文ミ次第累世御鴻  
恩を蒙り罷在候身分御國恩忘却仕候筋の毛頭無之候間尙御諭シ方ミ御手  
段も可御坐哉に御坐候所最初より叛人同様ミ御仕向ケに罷成候ての面々  
ミ身に取候ての嘸御情無之事と嘆ケ敷奉存候儀に可有之尙又右ミ族假令  
叛人同様ミ振舞仕候よもせよ直に御人數御指向ケ御召捕と申儀御國体ニ  
於ての如何可有之や乍恐一國父母ミ御立場萬一御德義に相拘り候儀ニ  
罷成候ての他邦ミ聞へも如何と深く心配仕候此度ミ儀に付公邊より土浦  
笠間等へ御達しミ面別紙ミ通委細御承知可被爲在候所右一見仕候て恐入  
候事おろく無此上御外聞と甚く以悲嘆難堪第一御政事御行届無之段を天  
下へ御顯し被遊候姿よて此上諸生不殘御召捕に罷成候とも御國威相立候  
譯よの參り申間敷殊よ十八日夜ミ始末僅十人余ミ者共及出合候のみよて  
數多ミ銃丸を相放ち果し合のみ無之頭組子又の主從散々よ馳散し大切  
ミ御役柄狼狽ミ余市店よりけ込又の橋下へ潛み又の形を替罷歸候杯其外

種々未練ミ振舞御國中ミ批判ニ相拘リ以ミ外御國威を相損候段今更不及事ヨハ御坐候得共扱々言語ニ絶候次第御國威相立候御仕組ヨテ却テ一層ミ御損を來し人ミ物笑ヒト罷成候儀ヨ御坐候尙又 公邊御届ミ上トハ乍申余リ横行ミ御仕懸ケニテ第一御城内ヘ相詰候族何レも銃槍武器を携中ヨハ槍ミ鞘を外し御中ノ口邊相詰居候者不少欵ニ有之右等ミ儀ハ總テ對公邊可被遊御斟酌御廉ヨハ有御坐間敷や見付等銃砲ヨテ相固め又ハ篝火を燒其外夜廻リ又ハ町々木戸をヰめ往來を改候等ミ儀是以テ非常ミ砌トハ乍申數日其儘罷在候様ヨテハ深キ御敬上ミ御意トモ難申上夫のみなトす大手御門小扉ヨテ白晝ハ切候事も御坐候欵ヨテ萬一間牒讒者ミ口ヨ懸リ候ヘハ何共恐入候得共御形迹不御宜事ニ落入可申斯迄御手重ニ被遊候も全く御役人衆一身ミ身構ヨリ恐多クも 君上ヨテ御配慮を奉懸候杯彼是世評も有之旁深く心配仕候一体諸生御取締ミ儀ハ下情御洞察被爲在候儀專一ミ事ニテ一昨年御國難以來士民共深く存詰罷在候折柄 勅諭御

廻達御延引被遊候のみヨ無之 御連枝様方御立入ニテ纔時ミ御模様替ヨも可相成御都合ニ御坐候間左候テハ 公邊をも御補佐可被遊御立場ヨテ御一家ミ御政事ヨサヘ御自身御世話も不被爲行届第一 叙慮を空敷被遊候段臣子ミ身ニ取何共残念至極日夜思詰候余一時ニ憤發致一昨九月中ミ動搖ト罷成候儀ニ御坐候其後格別ミ御變も不被爲在候所右 勅諭ミ事ヨリ起諸大夫等追々召捕ニ相成候段如何ミ結局ニ及ヒ可申やト苦心致居候折柄下總守著府間も亦ク帶刀伊豫之介等御呼出し御吟味ミ趣此表ヘ相聞候付彌 公邊御役人衆手段ミ中ニ落入 勅諭ミ儀も如何成行可申や此上御國難相重リ候程ミ難計左候テハ彌御國宛相解候見詰も無之旁一途ニ存込候事ニテ右ニ付候テハ種々ミ浮説も指起片時も難打捨一同及出發昨年五月中ニ動搖ト相成申候其後不圖も八月中ミ御大變ニ被爲及候段遺憾トも痛憤トモ可申上様無之臣下ミ身四体を裂候心地ニ御坐候得共時勢不得已恥を忍ヒ罷在候責テハ 勅諭のみも相守リ居候ハハいつしハ時節到

來叡慮を奉安 神州を爲夷狄を打拂候期も可有之やと夫のみ至念ニ存込居候所十二月中御返納之儀ニ至候段誠ニ以痛憤至極下々にて力及ひ不申事ニ付御役筋にて何と欵御名義相立候様盡力も可有之存候所直様も御返納ニ可相成御模様ニ相見右にて御名義も相廢レ候のみさす第一京師へ對不相濟御旨儀ニ及ひ可申と存意ニ趣それ〱御役筋へ申立候得共執政衆宅ニ於て一切相斷面會も不致候付存意ニ申述様も無之 御城へ罷出候様指圖御坐候間罷出候得二三日も爲相待終ニ面會も不致退出ニ及候杯色々諸生之氣を激し候も付兎ても角ても存意ニ可達様無之候間途中ニ於て面會存意可申述と存込候より長岡へ罷出候儀にて數十日押張居候初念も有之間敷全く五三日之内ニ爲御指登ニ相成候御模様ニ相見候より起候事ニ相聞申候然る所追々御評議も御六ヶ敷今日迄も段々と過し來候其内之血氣ニ任せ様々之儀ニ及候儀にて諸生之本意元より余念有之候譯之毛頭無之追々御論も承伏不致又之不法法之儀等御坐候も畢

竟右一事より出來候事御坐候間決して御論シニ不相成御次第ニ有御坐間敷奉存候一体一昨秋御廻達被遊候所、九月中ニ大發有之間敷昨春中も下總守著府後 京師御模様御聞届耽ト御挨拶も御承知品ニ寄候て之被仰立候之上 勅意御奉し被遊候程ニ御踏へ被爲在候所、帶刀等之儀ニ及ひ申間敷假令右之儀ニ及候とも五月中ニ大發之儀ニ御坐候去冬中も御返納之儀被仰出候所、直様も被仰立御名義相立候御工夫被爲盡候所、決して諸生之族彼是之事ニ至り可申儀無之畢竟 君上ニ御爲御名義相廢候て如何と深く存込候一念よりいつも〱意外ニ動搖ニ及候事にて其根源一ト通之儀ニ無御坐候所右之根源ハ指置枝葉之事にて致制布御論も被爲在候故承伏不仕事ニ成行候事御坐候然る所承伏不仕候て御國威相立不申候故無余儀それ〱御處置ニ相成候事御坐候へ共詰り御國ニ爲一命を指出可申と存込候壯士之命を空しく御取被遊候のみニ落入誠ニ嘆ケ敷儀ニ御坐候向きニ寄候て右動搖之儀ハ全く内々指揮致候者

有之杯申説も御坐候やニ承知仕候所更ニ會得不仕筋ニ御坐候第一 君上  
ニ御下知を以鎮靜ニ儀御示シニ相成候事ニ御坐候へハ右御下知を相用承  
伏仕候ハ一命も次第亦く至て安氣ニ事ニ御坐候所御下知をも不相用  
好て危機を踏終ヨハ一命を捨候儀人ニ指揮を受候て出来候事ハ無之ヨ  
シヤ萬一指揮を受候もセヨ御國ニ爲御上ニ爲とて右様ニ存込候ハ畢竟  
君上御徳化ニ被爲行届候故ヨ可有之候得ハ敢テ答候譯も無之勿論指  
揮を受進退致候杯夢々左様ニ事ハ有御坐間敷執政衆始メ御役々相揃相  
論候ても承伏不仕程ニ事ニ御坐候得ハ如何ある手段御坐候ても貳人や三  
人ニテ御國中ミ士民を動シ候儀出来可申理合無之誠ハ人心凝結致指追候  
情合より起度々ニ動搖ヨ及ハ候段全く他念無之儀一昨年以來自殺仕候者  
十人余ヨ及候ても御了察可被爲在是等ニ情態得ト御了察被遊候上都て  
根源ニ立戻リ御論被爲在候ハ如何ある頑愚ニ者共ても必定承伏仕候  
儀ハ指見候事ニ御坐候所是迄ニ御仕向ケ乍恐下情を御盡シ被遊ざる所も

可有御坐やト愚慮仕候殊ニ執政衆ヨて引受御論杯申儀ハ精神相満チ不申  
此御危難ヨ當リ一死を指出し御奉公可仕との容子毛程も相顯レ不申如何  
程激論諸生ニ亂妨を恐候とも執政ニ立場ヨて日夜親類子供杯 御城中へ  
引寄置詰所近く爲相守又ハ御目付職ヨて諸生ニ氣を取候爲應接向色々相  
變舌を二枚ニ遣候とも諸生ニ怒を受應接難相立杯總て一片ニ精神ハ出候  
事とも不相聞自然内外ニ悔を來候ヨリ益横態を相生シ如何共致方無之場  
合ニ至候儀ヨて詰リヨハ御家中を損シ候儀何共嘆ケ敷事ニ御坐候間得  
ト御熱察被爲在度奉存候 勅諭ニ儀ニ就テハ今更申上候儀も無御坐候へ  
共此度承リ候得ハ越前家ヨて一切御支ヘ可申上との手筈致候趣も相聞  
本堂家も同斷心組ニ罷在候趣虚實ハ難弁候へ共右ニ風聞虚傳も有之間  
敷既ニ御旗本衆志有る者ニ説を承候得ハ御家へ 勅諭被下置候儀ハ幾通  
よても相厭ヒ可申筋ヨ無之萬一他へ御下ケニ罷成候事ヨ及ハ候得ハ 徳  
川御家ニ御大變ニ可有之杯申唱候款ニ御坐候右様他々人々迄心配仕居候

儀ニ御坐候へりて此方ニ取候てハ腕ト御踏へも不被爲在候てハ不相叶御筋ニ御坐候所此節ニ御模様中々左様ニ御次第共拜見不仕尤御宗家へ被爲對候御義理も被爲在候間無余儀御都合ハ御坐候得共最初對馬守殿參上ニ折勅諭御納ニ不相成候てハ指向キ御家ニ御不爲ニ被爲在元來御家來ニ内ニ取繕候て御下ケニ罷成候御品此上御持張被遊候様ニ被爲對公邊御敬上ニ御意味も無之旁速ニ御指出し被遊候方御都合御宜敷旨頻りて申上無御據御情實ニて京都より御沙汰ニ相成候ハ御返納ニ可相成段御挨拶被遊候様も薄々承知仕候得ハ此度ニ御沙汰如何様ニ坎京都ニ方取成被仰出候儀ニ可有之此節公邊御役家ニ人内々被仰候意ハ御家ニ御返納可被遊旨被仰上候故右御沙汰も被仰出候事有之坏被申候説も傳承仕愈御返納被遊候ハ外夷御取扱向都て關東へ爲御任ニ可相成御都合ニ由も承込候左されハ益不容易御次第ニて御家ニ御進退ニ寄神州ニ大變を引出し御國体を辱候事も至り可申實以天下後

世へ御對し被遊決して不被爲濟御筋合ニ御坐候所畢竟御家老始御役々面々ニ姑息心より出君上迄不明不義ニ落入奉り候坏天下ニ公論も口惜奉存候間内外ニ真情御酌取ニ上得ト御勘考被爲在御遺算無之様仕度不堪至願日夜苦心仕候此御場合ニ至候てハ人心向背ニ相分レ候境別して御大切ニ御事と奉存候間委細ニ情實承り込候分御内含迄ニ申上候以上

三月

留守居呼出しニて土浦笠間等へ御達ニ趣左ニ通

此節水戸殿領内長岡驛へ尙又多人數出張致居不穩趣ニ相聞中納言殿も深く心配被致嚴重手配被致候へ共萬一御府内并他領迄も罷出法外ニ所行ニ及候程も難計右様ニ仕儀も至り候ハ於公邊召捕引渡相成候様被致度旨水戸殿より被仰立候付萬一他領へ罷出候節ハ早々召捕候筈ニ候間それハ手筈致置右様ニ仕儀ニ至候ハ早速人數指出召捕候様可致候尤多人數ニ無之一兩人又ハ姿を替間道等より忍び候て罷出候者可有之

も難計候間右様之者の見懸ケ次第召捕候積手配致置候様可取計候事

二月廿二日

別紙之趣松平肥後守土屋采女正久世大和守土井大炊頭戸田綏之介相達候間可得其意事

本文之内末文之方不分明ニ付牧野家より公邊へ伺直し候處同日夕御挨拶ニ通行之者の見張所にて姓名行先承り届ケ通し追可申出旨達替ニ相成候事

水戸家來

高橋多一郎

關鐵之介

吉成恒次郎

林忠左衛門

廣岡子之次郎

森五六郎

濱田平介

右之者共水戸表出奔致候趣ニ付他領等へ罷出候ハ別して速ニ召捕候様被仰付候事

但此分も本文伺同様姓名行先聞届通行爲致追申出候様相成候事

一真老辨誣之呈書

謹以書取奉言上候長岡諸生進退之儀ニ付過日御疑心相蒙候筋も有之委細其節奉申上候所右御疑心相晴レ不申候てハ甚ハ安堵難仕第一不相濟儀ニ御坐候間其後得ト愚考仕候得共蒙仰候證據等之儀更ニ心當リ無御坐全過日奉申上候磯原村郷士野口友太郎と申者へ私名前相認遣候一事のみニ御坐候間其節之始未得ト御聞取被下置度又々委細ニ書取奉申上候右之去月廿一日夜と相覺申候御船手武藤善吉於御殿中申聞御坐候ハ此度之儀ニ

付野口友太郎存意ニ趣至極尤ニ相聞候間承り吳候様よとの事有之友太郎儀ハ追々私共へ出入仕候者も御坐候間面會仕候所今般長岡へ御人數御指向ミ儀御治定ニ相成候趣恐入奉存候然る所同處諸生共是迄押張居候精神叛逆を謀候次第ハ更々有之間敷殊ニ右ニ内ハ至テ少年ニ族も御坐候歟ニ相聞候得ハ御人數御指向ミ上如何様ニ出來ニ相成候ヤハ難計候得共全く一時心得違不作法等ニ儀ニテ右ニ者無ニ無三ニ御打拂被遊候事ニ罷成候段誠ニ以痛敷奉存候間何卒只今ニ内相諭壹人ツ、も承伏爲致引取候様仕度旨申聞候趣誠實ニ相聞何を申も御家中ニ儀壹人ツ、も無事ニ相濟候様仕度ハ私共兼テの志願ニ御坐候間出來候事ハ候ハ是非相諭度旨挨拶仕候所然ハ同處へ罷越身命ニ懸ケ一同へ談判可仕併知面ミ人も無御坐候間書付を指出し吳候様押テ申聞御坐候へ共私共とても右諸生ニ内ニ別段知識も無御坐候付其儀ハ指支候旨挨拶ニ及候ハハ輕輩ニ身彼是指圖ケ間敷相成候得ハ罷越候も無詮事ニテ詰り御國ニ爲ニ不相成此儀ハ御

役家へ相願候筋ハハ無之候間書付六ヶ敷候ハハ使ミ振マテ談判可仕候付證據ニ相成候品遣し吳候様懇切ニ申聞有之全く計略御坐候次第共不相心得此期ニ至候上ハ誰彼ニ差別も無之御國ニ爲盡力可仕ハ勿論ニ事ニ御坐候間然ハ拙者名前を認遣し可申右を持參マテ諸生へ談判致候様挨拶仕懷中紙へ私姓名自筆マテ認遣し候所追テ承り候得ハ右友太郎長岡へ罷越候事も無之直様何レハ指出私諸生同意致居候との證據ニ仕候歟ニ相聞申候定テ右ニ一事達 高聽候ハ可有之愚考仕候所同人儀長岡へ罷越出先ニ於テ御召捕ニ相成候上白狀ニ及候事も候ハハ御疑心も可被爲在候得共右ニ次第も無之私相認候書付無故他へ出候儀第一不審ニ廉ニ有之尙又善吉長岡へ罷出候節同人召連それハ爲相働候事も承候得ハ前條ニ儀全く私を落入候手段と相見甚ハ以心外千萬ニ筋ハ御坐候尤少壯ニ族壹人ツ、も承伏爲仕引取候ハハ御國ニ爲無此上儀と兼テ存込居候事ニ付畢竟同人へ名前も認遣し候譯マテ其段ハ相違無御坐候間それ以不相濟との

御事ニ御坐候ハ、如何様被仰付候とも土貢可申上筋ニ無御坐候得共右ニ  
情實彼是行違ニ儀達 高聽居候程も難計心配仕候間厚く御酌取被下置候  
様仕度尙又以書取申上候事ニ御坐候以上

申三月

大場一真齋

重おふよし此衣をぬり

すて、今とあすあれ

三度ウきつれ

秘笈雜錄



晚綠齋秘笈

目次

時事問答

與熊谷某書

呈水野侯書

安積良齋

鹽谷世弘

秘笈雜錄

晚綠齋秘笈

或人來て曰去ル三日櫻田御門外ニ於て井伊掃部頭殿登 城ミ節 御家浪人ニて討留申候よし大老の首を討杯言語道斷ミ振舞可惡奴原ありと申候付扱々其ハ心得ウミき御一言御論伺度と申候へハ却て御論相伺と被申候付先ツ貴家ニハ 天照皇ハ御拜し不被成候や又二千年來ミ御國恩深くハ三百年來 徳川家ミ御恩澤御忘却被成候や相伺度と申候得ハ甚ハ當惑致候様子扱是ハ指置乍恐 公邊御暴政とハ不被思召候や微曰是ハ余り御過言ニ可有之 幕府御役々ミ取計如何ある儀御坐候とも暴政杯とハ更ニ不心得候と申候付其ハ扱々淺間敷御心底と奉存候 日本ミ祿を食候者 幕ミ暴政を不惡者おし乍併誰とて當時 幼君の 大樹公を奉恨候儀ニハ毛頭無之候得共司取計惡行一二を左ニ申述候

一 大老閣老ミ職分申迄ハ無之候得共第一天下を平均セしめ 神州ミ正氣を振 徳川家ミ御武威を四海ニ輝し 叡慮を奉安候様執政ミ當然赤子

も童女も所知然る所御承知も通近來諸蠻も夷賊を近付のみあふ御府内を遊歩甚敷の 大城爲舞登 將軍家へ拜禮迄御指許も相成候御儀恐多き次第の不有之や神奈川横濱等交易以來我國諸品殊々外高直是國亂も基指見甚敷の 神國武士も魂を守し大和劍を夷賊も渡せし始末開闢以來曾て有之間敷此一二をして靜謐の御政体との不被存候申迄も無之候得共 老公の年來 公邊も御爲筋を厚く被思召御爲筋も儀時々御建白被遊候趣奉伺居候所奸賊も有司共 公邊も御爲筋をの一ツも不思其身一生も無難をのみ專一も一身も權威を振候存念より聖明も老公をの御冤罪を奉爲負其外諸大名公卿方諸藩末々も至る迄 公邊御爲筋も儀被盡候方をの科を拵へ無体も冤罪を爲負當今改心致度ともこや是迄も惡行難遁自分も後難を恐れ飽迄暴政取行候儀指見可惡も甚敷の不有之や下拙過言も様も候得共御靜謐とのゆめも不被存候貴元如何と申候への御論御尤乍去 老公初諸大名御爲筋も儀御建白との

何レも儀も可有之や相何度候

一前も申通 公邊も御爲筋の 神州も正氣を不被失候の、自然と天下平均し恐多くも 征夷大將軍の征夷も 勅官を御守り被遊武家の武も字を守り攘夷も念を不忘人臣の人君を守り人君の 御主君を扶助し皇國の道を不失候様專一奉安 叡慮候當然御建白被遊候御儀の大凡是等も御儀も可被爲在奉恐察候有司共 公邊も御爲筋を被思召候の、御幼主も御砌と申御親藩と申聖明も 君と申幾重も奉依頼候筈もそれ、權威を振候存念も一身の後難を恐却て御冤罪を奉爲負諸藩末々天下も忠臣とも可申候士をの無理無体も辭命取計反逆同然も振舞言語道斷も可有之候貴兄如何御論一々御尤乍去天下忠義も士との其外如何相何度候忠義も士との申迄の無之候得共日本二千年來も御國恩を不忘却 神州夷狄も地と相成候儀を憂ひ奉惱 叡慮候儀を不被忍この爲も一命を投出し 幕府を扶助し夷狄を拂ひ 叡慮を安し奉んと其實

意を被盡候儀誰う爲そや全く 公邊之御爲 公邊之御爲の 神州之  
 御爲ニ候得の天下之忠臣則是之 前件申通 幕府之暴政深く不被爲叶  
 叡慮有司之取計御不審ニ被思召 水戸家へ 勅諭御下ケ被遊候御儀  
 と奉恐察候尤 公邊へのみ御下ケ被遊候ても愚見よての宜敷様被存候  
 得共元より 幕府有司御不審ニ被思召候事故 公邊へのみ御下ケ被遊  
 候ての御傳達等も如何御不審ニ被思召 水戸御家よの 威義兩公以來  
 御代々様御忠孝之段の兼て御承知被遊候御儀故御依頼被遊 勅諭  
 御下ケニ相成候御儀と奉恐察候尤左も無之候ても 御家之儀の 公邊  
 へ被爲繼候御家柄副將軍之御任ニ被爲在候得の 公邊を御扶助被遊候  
 御義理合ニ候得共前々申通御誠意御申立被遊候得の奸臣共直ニ暴政を  
 以奉押込候勢大名小名公卿方末々迄忠憤之段被達 叡慮御下ケニ相  
 成候 勅諭人君の勿論御同様臣下之情無此上難有仕合 主君御拜戴之  
 御受方貴兄定て御承知ニ可有之難有事ニ不有之や如何逐一御論御尤

然る所此度御返納被仰出候御儀の如何相伺度候

一 前々申通 公邊御爲無此上 勅諭ニ御坐候得の大老初それく有司共  
 實意ニ 公邊之御爲を被存候の假初よも御返納之義杯可申上筈決し  
 て有之間敷元の奸賊之有司共御政体を余所よおし一身之爲のみ計後難  
 を恐候より金子を以奸妄<sup>依カ</sup>之九条關白様を取繕候儀無相違事ニ相聞申候  
 其證據よの 御家之 公邊之御受ニの御達之趣奉承知候間重き 勅諭  
 是迄御廻達御延引之御廉被爲對 主上御濟不被遊候得の御申譯旁萬  
 端 叡慮御伺之上御直納被遊度御嘆願被遊候趣奉伺候所 主上御伺  
 被遊候ても 公邊御指支之趣 公邊へ御納無之ニ於ての違 勅ニ取扱  
 候杯之儀謀暴之至 御家よの大義ニ於て御返納被遊兼候御儀を奉察違  
 勅之筋ニ相成候節の御家如何様相成候とも御申譯難相立候得の無体  
 ニ 御家を可奉討奸計ニ相違無之候又 公邊へ御返納被遊候の尙更  
 御違 勅故 水戸殿も御返納ニ相成候御違 勅ニ無之候の於 水

戸家も御返納の決して無之筈ト同腹之九条様を以申來 水戸家の勿論  
恐多くも 主上御讓位杯之儀暴發も難計實ニ可恐事ニ候御論一々相聞  
申候得共此度 老公も 當公も御返納之思召の如何  
一御尋之趣御尤ニ御坐候 當君之御趣意毎度恐入候御儀ニ御坐候以前安  
藤對州參上可仕旨御内達御坐候趣承知其節我々共甚苦心仕安藤參上之  
儀の不容易聖明ニ 老公を前日奉離間今參上其内 當君之御一存  
を奉計御家 勅諭御返納之儀申上候儀無相違同志一同仕安藤參上之儀  
御斷被遊候様至願仕候所其御砌の 當君様も至極御盛んニ被爲在  
勅書之儀ニ於て何時何様申上候とも御受拂被遊候趣一同苦心ニ不及  
との御親書被下置候付難有奉存候度々參上仕候内自然ト安藤之奸計ニ  
御靡き被遊當今御返納之思召ニ被爲成候御儀如何之御見込ニ被爲在候  
や御家臣にて是を奉諫候誠志之者を自然ト御嫌ひ被遊候様被爲成追々  
誠忠之臣を御退被遊奸人を舉給ひ當今政府監府都て奸臣充滿し無体ニ

誠士を退候様相成候次第恐入候御義ニ奉存候既ニ長岡へ罷出居候誠忠  
之士民矢玉を以打取候杯可惡次第ニ御坐候或人執政之某ニ説て云追々  
承候得の御先手等玉込之筒を以被罷出候杯不容易鎮撫之御役目ニ鐵砲  
備と申の何故ニ御坐候や鎮撫といふ先手であるといふ文字ニ御坐候執  
政答て曰尤ニ候初之討取候譯の無之萬一手向之節之用意ニ候或人曰  
御尤ニ候へ共長岡の實ニ誠忠之士林ニ御坐候得の玉込之筒を御指向ニ  
相成候様承候得の武士之當然一步も相進討死之覺悟指見ニ御坐候傳承  
仕候ニ長岡にての最早御廟算相立御諭御坐候を待居候趣御先手之儀の  
軍陣之表役鎮撫之御役の有之間敷夫々御役方にて穩便ニ御出張御坐  
候て可然奉存候若御決斷ニ不相成候の 老公へ拜謁之上可奉諫奏旨  
申々れに至極尤鐵砲之儀一圓持參不致候様取計可申と有々れの御決斷  
實ニ難有鐵砲御持參と相聞候の、長岡も男氣有之者の相進候の必定  
左候得の國乱指見へ御鐵砲御持參さるの水府の是切と思召可然 老公

ミ御趣意も砲術の攘夷ミ器と被遊必味方を可討品ニ無之乍恐武士  
 ぶん者何方へ罷出不慮ミ儀有之も帶刀御坐候ハ不足有之間敷奉  
 存候と重て相説歸宅致候由ミ所奸人ミ臆病共飛道具あくてハ一步も不  
 被進遂ニ鐵砲持參ミ振りニ相成持出候得ハ元々日本魂の長岡勢聞も  
 へす相進紺屋町よて御承知ミ通先代未聞ミ始末柄奸人ハ必臆病ミ働と  
 承り居候所實ニ可愁儀ニ御坐候得ハ 老公ミ尊慮奉伺候得ハ玉込鐵砲  
 等ミ儀更ニ御承引不被遊誠ニ以奉恐入候國亂を招キ國家を蹙る逆臣と  
 ハ是かるへし如何御論一々相聞候乍然長岡誠忠ト何儀ニ可有之候や  
 一御尋ニ御坐候得ハ楠公以來重キ 勅諭御意味合を御承知被成候や又名  
 義名分と申儀を御承知被成候や存分相同度候徹曰拙者も武士ニ候得ハ  
 名義ミ儀承知いし候是ハ御尤千萬痛入候次第長岡とても矢張御同意  
 ニ可有之萬一御返納被遊候ハ御名義御名分御取失ニ相成候儀有志ミ  
 臣情ニ不相忍 兩君様へ拜謁奉願諫奏奉り度存詰候得共不相濟無據同

所ハ出張萬一奸臣ミ計よて御返納ニ可相成も難計是を存候心得ニ可有  
 之 勅意を奉る事有志ミ士大義難遁所故死地を同所ニ求居候事ハ御坐  
 候尤深キ存意有之候儀トハ相見候得共同志ミ外ハ難許次第ト相覺申候  
 實ニ神ミ如しと奉存候御論御尤ニ候へとも神ミ如しト如何相同度候  
 一神の如くトハ御不審御尤ニ御坐候往昔蒙古ハ我國を攻候時ハ人民必死  
 を極め 神州ミ正氣憤發し戦しハ神風吹來て異賊を塵よし是則神國ミ  
 必死を助ケ給ふかるへし此度 勅諭御返納申上候 幕府の臣ハ勿論  
 水陽藩ニて御返納ミ儀默々致居候 神國夷狄ミ地ニ相成候も不構二千  
 年來ミ天恩を忘却セシ國賊あり又長岡ミ儀ハ 勅意を御奉し被遊御名  
 義を相立將軍家を御扶助被遊夷賊を拂御國威を振起し可奉安 叡慮候  
 様よと死地を求て 主君を奉諫奏候精忠神も助けさかめや子細ハ先達  
 紺屋町ミ始末出張ミ役人ハハもそれハ討取へき用意先鋒四五頭執  
 政參政其勢夥敷何レも得物を携其有様勇々し々れとも長岡勢ハ僅貳

十人計出迎しよ恐怖してや有らん流石先鋒始一同道具を取捨逃歸し振舞不思議千萬ニ御坐候人力よてのよも有之間敷被存候扱御尋々眼目江南ニ一条も此理ニ御坐候流石三十五萬石ニ大將殊々天下ニ大老職ニ權威且暴政以來我身を危ふみ別して堅固ニ往來致候由兼て傳承致居候呀此度僅十七人ニ勢を以大將ニ首を搔候事決して人力よて及事ニ無之譬へハ拙者よいハセ御駕籠脇を守護セし時十七人位切入候とも同勢相舉り毛程も御駕籠ニ手を懸させし事抔振舞存意ハ無之彥根藩とても同様ニ可有之候得共天ニ征し給ふ所可恐事ニ御坐候御論相聞候得共天の征し給との何故ニ候や相伺度候

一 我國ニ祿を食者上下貴賤となく我海岸ニ夷賊ニ舟を繋るハさへ誰とて心能者ある間敷殊々當今外夷増長日ニ増切迫ニ有様 神州ニ生育して天照皇を拜する身分是を憂ぬ者あるよし憂ぬ者ハ人面獸心可惡ハ只有者ニ取計ニ今度 神州ヘニ働其功舉て數々よし

一 其功と申ハ筆紙ニ盡しうさくあるよしケ条書を以て左ニ申述候

一 天下ニ大惡人國賊ニ大老を討留る事

一 神州ニ御危難を奉扶助候事

一 徳川家ニ御武衰本ノミを奉扶助候事

一 徳川家ニ御武威を奉助候付 神州ニ國威を被振起事

一 浪士として舊主ニ名義を被相立事

一 農工商の辛苦を相救事

一 君辱臣當死ニ義ニ一字ニ相叶候事

一 神州ニ御危難を奉助候付奉安 叙慮候事

扱義の重き所此八ヶ条ニ御坐候此義を埋置候ハ大老ニ行ひニて可惡ニ甚敷ニハ不有之や此義を顯し候ハ則此度有司ニ働ニ御坐候御論御尤ニ候得共一旦ハ愉快ニも可有之後々如何御見込相伺度候

一 御尋御尤此段甚苦心仕候乍併此度大老ニ辭命全く天ニ征し給ふ所殊ニ

御家よの大老家よの御主人家之彦根藩とても 御家よ手向ひ等天照相<sup>本ノマ</sup>成間敷奉存候乍去御油斷無之儀專一小石川御手厚ニ仕度日夜苦心仕候乍然御家浪人よて天下ミ悪人を討留候得ハ 御家よて 神州を御扶助被遊候御道理御本意至極 兩公様よも定て内々御愉快ニ可被爲在奉忍察候 老公ミ尊慮ニ此度ミ振舞義の重き所難遁と見へふりと被遊又尾張様よハ 水府家臣ミ如きを十人程近侍ミ召遣度と被遊又ハ薩州細川<sup>本ノマ</sup>ミ堅然天下ミ忠臣士道御立被遊候様盡力有之士道御立ニ相成候儀 水藩一統ミ面目無此上儀ニ奉存候御論一々御尤 勅諭ミ儀ハ此先如何御見込相伺度候

一 勅諭ミ儀是迄取工み候ハ大老と安藤兩人ミ所業ニ有之候得ハ此度御返納ミ儀申立候者於義有之間敷 御家よ納り候事無相違此段御安心可被成候既ニ拙者御守衛ミ列ニ加り居候へ共支度等よも及申間敷や

一 御家ミ 勅書 水城を離候事不容易此後萬一よも御返納ミ相成候儀ニ

御坐候ハ、江戸迄ミ道中必天變可有之既ニ先日爲御登ニ可相成節番頭ミ某よハ俄ニ母人不幸ニて御守衛不相成士大將ミ某ハ此伯母よして服忌相受是又御供不相成又某よハ御守衛ミ御道具調んとセし時二階ハ落腰を抜候始末此人等御返納ミ儀専ミ取計候奸臣よて天性難遁儀ニ可有之 老公御返納ミ 尊慮も全く奸人ミ爲ミ御涙と共ミ爲御指登ニ相成候儀を勇進て御守衛可仕杯臣下ミ情ニ有之間敷既ニ大番組ミ壹人御守衛御免奉願候趣天晴義士ミ振舞感するよ余有り 勅諭ミ儀大義御承知被成度候ハ、拙者大義論と申本所持仕候間何時よても可入貴覽候愚論云々

與熊谷某書

安 積 良 齋

交淺くして言深きハ聖人ミ戒る所あれとも事柄ミ寄れハ其戒を守り難き儀も御坐候今事急ミして是を弁するよ暇あふば僕盟兄ニ於る實ニ傾



蓋き親きニ御坐候得共杯酒之間よて御氣象寛平よして慷慨深き一旦を  
會得致し旁今日之感慨ニ堪兼候より寸志を具陳せる左き通りニ御坐候  
御明察之上御取捨可被下候扱ひ今月三日御家ニ御災難ニ就てハ世上ミ  
流言紛々いふし中よ君候御容易かふるさる御怪我被遊候共承り誠ニ以恐  
入候次第ニ御坐候其御藩中ニてハ定て斷腸髮指よ御堪かされさる御  
儀と致推察候然る所先達ニ風聞承候所二月上旬水戸ミ藩士四十余人所  
存ある由ニて出府致懸候所水戸ハ重役共同勢三百余人を指出し取押方  
致させ候所彼者共却て乱妨ニ及び相互ニ數多き死傷御坐候て僅よ二十  
余人ニ打たされ逃去候付又早速捕手を指出し置候ハ此段 公邊へ相届  
候趣既ニ世上へ流布いふし候事よて此度御家ミ乱妨ニ及候ハ全く彼ミ  
亡命ニ餘黨ニ御坐候所此者共陰よハ如何可有之とも陽よハ既ニ無構浪  
人ニて不埒至極ミ族ニ候得ハ幾重よも嚴重御吟味かされ兼々外聞より  
も事情を探索かされ候儀御專要ニ相察し候時よ竊ニ御藩中ミ御沙汰を

(朱)  
第一

(朱)  
第二

承り候得ハ狼藉者ミ張本必定 水戸前中納言殿かれハ即是不共戴天ミ  
仇かり片時も早く御主君ミ仇打取臣子ミ義を盡さんと御決心かされ追  
々御人數を御國元より御呼下し被成已ニ軍立ミ御用意迄完備かせる御  
様子ニ承り込候是等事 公邊ニも 尊慮被爲在候て既ニ上使を下さ  
れ色々難有御内意をも御坐候へ共兎ニ角ニ一藩中ミ初念挽回かされ難  
き由□御請被成候趣風聞致し右ニ云るせる事共當時流言ニ御坐候得ハ  
誠ニ以大慶ミ事ニ候得共萬々一右様ミ御實迹御坐候半ニ於てハ是尤天  
下ミ至大事ニて獨井伊家ミ存亡ニ關せるのみかす德川家御代ミ治乱  
興廢ミ機今日ハ判談致候半欺乍恐君候ミ此職ハ御任セられしその初温  
恭院殿ミ御遺託を受 御幼主を御擁立かされ候節□奸邪ミ陰謀を發摘  
いふし社稷を盤石ミ安きよ置給ひ群小ミ妬をも避給ひす御身ミ危きを  
も顧ミ給ひす日夜天下ミ事を憂勞し給ひしも 温恭院殿御遺託ミ御命  
を重するのみかすハ則 德川家へ御精忠ミ御奉公を一筋よ思召込られ

候様奉推察候得の今日如何計重き御輕、我被遊候半も君候よの兼てよ  
 御覺悟ミ御事ニて今更御驚動ミ場も有御坐間敷候所狼藉者余リミ  
 不法を働きたれは是又其實情御吟味ミ事勿論時宜ニ寄大事ニ及ひお  
 ん事元より武家ミ御咎よこそ候へ既ニ大事と申うら御輕、卒ミ御取計  
 ちされ候ての後臍を嚙候とも及び難御儀も御坐候半欵扱當今或は朝敵  
 ありて彼より此度ミ狼藉ニ及候儀御坐候得の上ハ 將軍家ミ御爲下ハ  
 君候ミ御爲ニ御一藩中死力を盡し三軍ミ御先懸おされ候半事至極御尤  
 ニ候得共左よのゐるす 前中納言殿是迄跋扈ミ御振舞御坐候へと未タ  
 朝敵と申程ミ形迹無御坐候よこあふより狼藉者張本杯ミ御名を蒙らし  
 め人數を御指向ケ被成候半よ於ての却て彼策中ニ落入候様存し其策ハ  
 今こゝも申よも不及又別ニ難問十ヶ條を設ケ當時理勢ミ安危を占ひ可  
 申候近比上使を被下難有御内意をも被仰聞候得共一藩中挽回おされ  
 べき旨御請被成由上意ニ背き我意を恣にするの御嫌疑あるべきに似

(朱) 第三

策中ト云事此  
 方ニて本ヨリ  
 毫モナキトニ  
 テ疑心聞鬼ニ  
 等し

りは一ツあり兵糧を御買込被成多人數を御集め被成候杯淺野家臣復讐  
 ミ仕業ニ御相違して顯然と金革を御用ひ被成候半欵此儀 將軍家ミ御  
 許し可有御坐事ニ候や是二ツ也兵出不無名 朝敵を征伐せるとの不可  
 申私怨を討せると唱候て天下ミ御法度ニ御背き被成恐るべきに似  
 たり是三ツあり人各爲主の儀ニ從ひ御主君の仇を報せると急よして天  
 下の御法度を顧る暇あふといて妄よ干戈を動さんよ於ての曲却  
 て我ニおし候半欵是四ツ也金革を先何レミ地も御用ひ被成候半や五  
 ツ也御出陣ミ節御長君或ハ御一門様等よ君候ミ御身替りニ采配をとり  
 て軍勢を指揮せへき御方御坐候や是六ツ也精兵利器多しといへとも名  
 已不順地勢又主客ミ便を異よせられの必勝を難期御儀ニ御坐候半欵是七  
 ツ也多くミ人數を我領分よ横行せしめ且親を敵手ニ委棄すべきを可り  
 ちられの必定 當中納言殿軍勢を催して我後を攻給とん時よ御藩中或  
 ハ援兵を繰出し候御族も御坐候半欵是八ツ也御家の 徳川家ニ於て双

## 第四

赤き御名家と申せと御譜代にて候 前中納言殿殿扨の御振舞御坐候と  
 も正しく 東照宮に御血胤に御坐候への御門地之高下に於て如何に御  
 坐候や是九ツ也 前中納言殿奸雄に御性質に御坐候得と之を天意に察  
 し人事に考候よ未タ御運強き御方に御坐候所あるを無名に師を御仕  
 懸かされ避實擊虛に兵法に相違致候半は是十也右に十條を以反復推考  
 致候得の何分よも當時顯然復讐を御計被成候半事恐くの萬全に長策よ  
 りよさふん欵併當局に御身に取候ての事の成否のともかくも片時も早  
 く仇家に門に討死被成度御一念に留りよきをも至極御尤に存候得共古  
 人よ所謂死之易く處死の實に難しと申儀御名々様兼ては御講究に御儀  
 と存候得共此節柄に於て尤御深志体認被成度御事、御坐候多人數御大  
 切に身命を投打て大事をも成負せ 將軍家へは御忠義をも立ち君侯に  
 御本望よも爲叶候事あるに申迄よも無之候得共右に具陳せる如き次第  
 にて乍憚其儀無覺束御筋に御坐候への事を御始に被成一時外目よも美

々敷御名々様御心よ潔き御儀との存候得共全く匹夫に勇よして千萬人  
 に壯士犬死に恐れある事智者に取さる所あり且又事端一度開き候に  
 御家と水戸家と決して兩立せよし一存一亡あるに難計といへど  
 も右に難問よ付て熟考いよし候への頗る可恐事共は御坐候のみあるに  
 相互に徒黨一揆等事蜂起致し或の内患よして邊境を開きし事坏つど  
 ひ生して 將軍家御威光に薄よき可申も實に此事に濫觴致候半に於て  
 是迄御先代々御忠勤をも今日を限りは水に泡と消果候半事尤も口  
 惜き御事、候き夫共只今一圖に思召よられ候の外に御計策運よすへき  
 御筋あるに是非に及されと左にあるよし昔元祿年中大石良雄等  
 當 變を聞きしに復讐に事の打忘れよる体よて只存祀に願に急々たる  
 の流石に智謀に士よして能々輕重なる所を知れる者とそんし候夫仇を  
 報せざるに内匠頭殿一人に怨よして絶世に淺野家萬代に耻辱されぬ姑  
 く彼を棄是を取る所以に識見御坐候に其後些少に人數にて天地も爲に

震動せる程に大事を成負せしりしも皆能大義を詳よして死に處せざるの  
 宜しきを得候功効よて則是古今比類なき復仇に好き手本に御坐候半歇  
 今御家之御災難内匠頭殿朝法を犯せし事は相違にて御藩中ニ於て淺野  
 家臣に如き存祀に御心配少しも無之儀と存候得の假令如何計御憤激  
 之廉御坐候共御先代々より御忠勤に御事を顧み給ひ且君侯是迄御奉公  
 被遊候御本意をも尋させ給ひ又 皇國氣運に泰否をも御會得御坐候上  
 御藩中の昔趙國に蘭相如く廉頗に屈せし如き當時の處女に如くかり給  
 ひて其内御名々様今日御憤激に御志を後々迄御息りかく仇家に動靜を  
 伺察致し此度之事愈 前中納言殿に御指意ニ出候事情を得候半歇或の  
 事情分明かふはとも愈 前中納言殿に發起致候半よの此切よて此後深  
 く御慎かされ候事決して被成らふき情よて二三年に星霜を経候間よ必  
 ず跋扈御増長に御振舞候半時よ公私に時宜を斟酌いふし義衆を御糾合  
 被成餘日は復讐に舉をかし給之んニ於ての仇の已ニ天と神と人とのい

第五

第六

とひまつる所よして我軍無百疾謂之必勝とかれの御忠孝をも御名義を  
 も御功をも全して則何に良策あり是ニまぐへき又當今に形勢にて御藩へ  
 對し援兵を出し復讐を御勸申候御族も御坐候半亦利害を説て當時御穩  
 便を御勸申候御族も御坐候半何レも皆歴々に御方ニ候得の凡人に不及  
 御見究等御坐候御中へ僕等輩に如き助言の誠ニ以奉恐入候得共又愚者  
 に一得と申儀も御坐候得の右に具陳せる所は理勢を得御勸弁に上御  
 穩便を御勸かされ候御方へ必御同心被下度御事僕一身に願ふるはす乍  
 恐 徳川家、御爲といひ天下萬民に御爲といひ其關係せる所尤重大ニ  
 御坐候得の深く御心を被留只遊説者に話説とかし給之さふん事を希ふ  
 のみ  
 孔子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也必也臨事而懼好謀而成者也猶此  
 儀能々御考合せ可被下候以上

三月



前公 天朝ヲ尊ヒ 幕府ヲ敬ヒ玉フ至誠ヨリ發シ恭謹ニシテ日夜  
朝暮禮敬怠ラス每朝水ニ浴シテ遙拜シ或ハ著述ノ書ヲ獻シテ裨益ト  
シ攘夷ノ爲ニ大銃ニ鉛子火藥ヲ添テ獻シ巨艦ヲ製造セラル、カ如キ  
ハ人ノ知ル所之外國ヲ所置スル事ヲ建白セラレシ類ハ人ノ知ラサル  
所ナリ歸邸ノ後も深更マテ文書ヲ閱シ精力ヲ盡サレシハ是人ノ知  
ル所之此ノ如ク鞠躬盡瘁セラル、一世ニ疇ヒ多カルヘカラス然ルヲ  
跋扈ナト、稱スルヲ世ノ浮説ニ泥タル之浮説の起ル所兩端アリ一ハ  
防海ノ一ヲ議シ玉フハ嫌疑ヲ避ケス知無不言ト云ルカ如クナレハ  
幕府ノ吏ノ中ニハ御存分ニ過タルト思ヒシモノ有ヘシ一ハ士民動搖  
ノ謀主ヨリ出タリ謀主ノ術ハ衆心ノ向背ヲ挾ミ上ヲ要シ求ル所ノ如  
クセント謀ル其身要職ニ居テ 幕府ヘモ其術ヲ施サントセシ故 幕  
府ニモ 前公ノ意ト思ヒシ人モアランカ又其徒ニ信ヲ取ントテ其意  
ノ欲スル所ハ 公ノ意ニト稱シ 公ノ惡シキト仰セラレシ却テ御内

慮ハ如此シト宣言シ其徒ハ是ニ欺レテ傳播スル故實事ト相反セル浮  
説世ニ流布シ謀主ノ跋扈訛テ 公ノ跋扈ノ如クニ思フ人モアルハ深  
ク慨嘆スヘシ

## 第四

我公恭謹ニマシ、テ人ノ見サル所ニモ敬上ノ禮怠リ玉ハス天下ノ  
憂ヲ憂フルヲ赤誠ヨリ發ス前後著述セラレシ書ヲ拜讀シテモ行住坐  
臥片時モ天下ヲ忘レ玉ハサルヲ知ルヘシ防海ニ心力ヲ盡サレシモ  
天朝ヨリシテ 幕府迄擁護セラレシトノ精忠ナリ然ルヲ奸雄ナト  
、稱スルハ讒ニ非レハ浮説流言ニ惑ヘル之險腐ミ語信シ難キハ粗前  
辨ス此人ノ學アリテ讒ヲ信スヘキ謂レナシ偏聽セスシテ彼此ノ情實  
ヲ得ンヲ庶幾フニ

## 第五

動靜ヲ伺察シタリ凡兩三年動搖ノ徒ヨリ出タル説ヲ偏聽シテハ實情

ヲ得ルコト難シ 公命ヲ謹奉シタル純臣ノ語ヲ兼聽セハ眞ノ情實モ分明ナルヘシ

第六

二三年ヲ經タランニハ 公ノ至誠著見シテ跋扈ニ非ルコト明白ナルヘシ今ハ動搖ノ謀主モ死シ囚レタレハ 公命ヲ矯誣スルコト能ハス勿論其餘類モ尙多ケレハ疑似ニ涉ルコトヲ仕出ス者モ有ヘケレモ二三年ノ間ニハ餘類モ減シテ眞情自ラ露ルヘシ詩ニモ讒說ノ行ハ、コトヲ嘆シテ不舒究之ト云リ舒々トシテ推究セハ眞情ヲ得ル事アルヘシ

呈水野公書

鹽谷世弘

乍恐奉申上候

一井伊様ニテ討留ニ相成候浪人者懷中ノ水府老公ミ御自筆ニテ今度ミ手當として金十五兩遣し候と有之よし風説仕候得共是ハ 水戸老公を御

惡み申候者ミ作り事ニテ決して御信用不相成儀と奉存候此度ミ事若  
老公御存しヨ御坐候得ハ凡十七人ミ者共討死と覺悟可仕ハ勿論ニ候間  
死骸ミ内より右様ミ書付出候てハ 主家ミ滅亡ニ至リ候事ハ百も承知  
ヨ可有之然る所證據ニ相成候書付類懷中仕候事ハ必定無之事と奉存候  
且又十七人ミ内八代洲河岸ヨテ自殺ミ者貳人脇坂候ニテ深手ニテ相果  
候者壹人有之候所其懷中ハ 老公御手當金ミ出不申事第一不審ニ御坐  
候 老公御書附を大切ニ致肌身を不離位ミ者懷中可致筈無御坐候且又  
老公も書附添て賜り後日ミ證據と成候様ミ事ハ萬々被成間敷候筈ニ御  
坐候一体其場ミ死傷人總て檢使を不申受直ニ屋敷ヘ引取其後懷中ハ書  
附出候様申觸候者彦根藩人重々不埒至極ニ御坐候間是等嚴敷御詮儀可  
被爲在儀と奉存候

一十七人ミ者乱妨と可申候得共内八人尋常ニ自訴仕同意ミ者姓名申立御  
大法相待候程ミ者ニ候間其外 水戸表ニ罷在候同志ミ者或ハ上ハ被申

付候義杯ミ御吟味ハ御無用ミ儀ト奉存候數をセ、つて蛇をい、すと世話ニ被申候通余計ミ御吟味有之時ハ 水戸ニ残り居候勇士忠直ミ氣を動し却て事を生し候様相成可申候扱右ミ御仕置ニ至候てハ尋常ミ自訴ミ廉を以磔刑ニ可被行を獄門ト申位ニ御惑みを被爲加一等を被爲減出格ミ御仁惠を被相示候様有御坐度奉存候事ハ少々相違ニ候得とも赤穂四十七人御預中一度も評定所御吟味も無之畢竟自訴い、し御大法を相待候者共ニ候得ハ固より事明白ニ相分り候始末ニ付御吟味ニ及候故ト奉存候切腹ミ節も陪臣ミ切腹ハ檢使を不被爲付御定法ミ處御直參同様ニ御徒目付等を檢使ニ被下候者不届トハ乍申其主人ハ忠義を盡候所を以御定法ニ御斟酌付候儀ト奉恐察候晋の謝安リ事を陶侃稱美して謝公ハ法外ミ意を得、りと申候都て法ハ拘泥致候へハ凡俗の役人ニ御坐候法外ミ心持を以て刑人ミ情實を察し候處置を付候所誠ニ仁義を盡すと可申候此度ミ一件も法外ミ心持を以て御所置無之候てハ 水戸御一

家のみニ無之天下ミ士氣を損し終ニ御武運ミ損し候様相成可申やと奉存候

一去ル二月廿二日 水戸様より出奔御届出候高橋多一郎林忠左衛門等外數人ハ三日の事ニ加り不申 當中納言様ニ相背き候得共御國を厚く思ひ候所ハ忠憤ニ可有之候間召捕ニ相成刑法ニ被行候てハ惜き者共ニ御坐候外夷御氣遣最中の世の中右等ミ者共被爲助非常ミ節被相用候ハ、拔群の勇戰可仕者共ニ御坐候最早嚴敷御穿鑿ハ被爲止候様有之度奉存候

一橋様を御養君ニ被遊候様有之度ト企望仕候ハ外夷ミ儀御心配ミ折柄御年長よて御英明ニ被爲在候 御方様何卒 將軍家ニ御備り被遊候様有御坐度奉仰望候就てハ 刑部卿様兼て御聰明ニて御家門様方ミ御中ニて御年長よも被爲在候付世上人望ミ歸候事ハ七八年以前カミ事ニ御坐候 公方様御養君被仰出候後 刑部卿様を御入申度ト計候得ハ不届



ニ御坐候得共其以前より企望仕候者ニ於てハ更ニ惡意ヨリ無御坐候ト奉存候殊ニ福井侯ハ阿部伊勢守様御勤役中ニ其事頻リニ被仰立候由分明ニ御坐候ト奉存候人之不仁惡之已甚乱也ト聖語ニ見候通不仁ニ人トモ已甚しく是を惡む時ハ窮鼠却て猫を喰候道理ニテ禍乱を生し申候ニ於て不仁ニ無之者を嚴敷取扱候時ハ禍乱を求候事ニ相成申候 尾州中納言様御隠居被仰付攝津守様御本家御相續被仰付候節御對面ニ不及ト被仰出候杯ハ乍恐御父子ト相成候間を 台命を以て御隔被成候様相聞御政体ニ於て恐入候事ニ奉存候依之 一橋様 水戸前中納言様尾張前中納言様松平越前守様一同御慎御免被仰付候様有御坐度奉存候

一 權現様ハ上杉浪人車丹波上を觀候者ニ御坐候ても露顯ニ後一命御助被成候のみニ無之乞食ニ頭被仰付格別ニ大量凡慮ニ所及ニ非すと申候得ハ火附盜賊ニ類ノ極惡人と違ひ其主人ニ忠義有之者ニ候得ハ法外ニ意よて御手段可有之儀ト奉存候扱 水戸様御家來安島帶刀茅根伊豫之介

越前様御家來橋本左内等ハ世上ニ稱し候程の者よて主人ニハ忠義ニ相違ニ無之候間大法よて御仕置被仰付候も御斟酌ニ御手段被爲在度儀ト奉存候然る所帶刀切腹被仰付候ト申条牢屋ニテ非人首を打候由ニ候得ハ打首同様ニ御刑戮ニ相成候よし元來御仕置付之ニ奉行様より御伺ニ相成御老中様より二三等も輕く御指圖御坐候よし承及ひ申候然る所帶刀御仕置ニ限り御奉行様より御伺ニ相成候所二三等罪重く御指圖御坐候由右様私意を以て御法を御枉ケ被成候てハ人心不服筈ニ御坐候依之帶刀等御仕置一件ニ付遠島追放押込ニ相成候者二三等も御仕置御有免ニ相成候様有之度奉存候

一 今度ニ一件ニ付御役人様方御用心被遊御供被爲増候儀御無益ニ御事ト奉存候守柱第一ニ御身をこそ目懸候儀ニテ既ニ本望を遂候上ハ何程狂暴之者共ニ候とも外御役様ニ對し乱妨ニ及候儀ゆ先ノ有之間敷警ハハ人を斬留メを指咽を突候上ハ手の脈所腹ニ急所足ニ脈所迄刺候馬鹿

者の決して無御坐まして御役人様方ま御中少々まても 水戸様ま御怨を御受被成候御覺不被為在御方様まの尙更ま御儀ニ御坐候若御役人様へ不殘狼藉ま及候節まの公儀を御怨み申上候ま當候間 水戸家ま安危ま拘候道理まの的面ニ御坐候是式ま事まの常陸士共勘辨致居候事まの必定ニ御坐候乍恐掃部頭様御怨申事まの數多可有之御役人様方まの努々御氣遣まひ不被為在候

一掃部頭様御黜まケ被成候方々板倉周防守様大久保右近將監様鶴殿民部少輔様土岐攝津守様淺野備前守様佐々木信濃守様木村敬藏様永井玄蕃頭様岩瀬肥後守様川路左衛門尉様黒川嘉兵衛様御始世間評判ま御方様ニ御坐候就中板倉様御家政向御拔群まて中國邊まて有志ま者まの御稱美不仕者まの無御坐候よし然るま所 水戸様を御惡み被成候より曖昧まの情を以御退役等被仰付其外御退まけ被成候儀乍恐御私意無之まの被申間敷御私意まて人を御退まけ被成候まての衆怨の集候筈ま御坐候

一掃部頭様御事 禁裡を輕蔑被成 天子ま御舍弟様御始近衛様等大臣方公方様ま御位重まき方を塵芥を吹如く御取除被成右ニ付ても一昨年以來刑戮等相成候五六十人ま内天下有名ま學者も有之一藩ニ忠脱カ臣まと被唱候者も有之多くまの隱刑を蒙り申候是ま依まて天下有志ま者まニ於まての盡く切齒憤怒罷在候 水戸侍も此所第一ま憤り此太平ま御代まて右様罪人夥敷出候事 權現ま以來無御坐候古語ま人盛勝天々定而亦能勝人ま申候扱掃部頭様御盛ま時暴虐を恣ま被成人盛まして天ま勝の勢ま御坐候所有志ま者まの何ま天定て人ま勝の時可有之と内々申居候所まれより三日の事を承り 水戸の有志快能致候と喜ま候者數多有之候右様怨憤ま集候掃部頭様御壹人ニ止まり候間外御役人様方まの御用心ニ不及儀ニ御坐

一天保の時ま鄙賤ま者御役人を怨申候迄ニ御坐候間御 役欠ニ相成候時石擲ま留まり申候此度ま儀まの有志ま士憤怒ま不堪候間乃傷ま及申候怨甚敷

時の怒るゝ至ると申候得ハ此度之儀ニ御坐候然るゝ此節 水戸表ハ御  
府内へ御家中出候事殊々外六ヶ敷被仰達彦根杯より武器人數夥敷參候  
事ニ御坐候得共一向御構無之段御偏頗之様有志之者ハ存申候大學ニ其  
之所哀矜而辟焉其之所賤惡而辟焉と有之通り 水戸様ニ方ハ其之所  
賤惡辟するの御氣味有之此度ニ事御所置次第ニて治乱の界ニ相成候間  
公明正大無偏無頗ニ御沙汰ニ及候様所仰望ニ御坐候  
右申上候内ハ道路ニ流言等交候事情ニ相違ニ儀も御坐候へ共下情ニ  
所奉達御聽度思召をも不相願乍恐奉言上候以上

秘笈聞見漫筆

心の友

安政戊午九月

秘笈間見漫筆

三百五十五

秘笈間見漫筆